

YUUCHI SUZUMOTO

涼 元 悠 一

Die Nachtjäger

ナハトイエーガー

Erster Akt

第一幕

Freyja von Lindenheim

～ 菩提樹荘の闇狩姫 ～

ナハトイエーガー ～ 菩提樹荘の闇狩姫 ～

涼元悠一 著

nj1_suzumoto_060101.pdf

<http://suzumoto.jp/>

<mailto:zumo@myad.jp>

2006年01月01日 初版

以下の条件をお守りいただければ再配布は自由です。

- ・ 配布にあたって配布者が一切の対価を受け取らないこと。（販売のみならず、手間賃、通信費、紙代、メディア代等の授受も禁止）
- ・ タイトルページ、この注意書き、ファイル名を含め、全内容を一切改ざん又は削除しないこと。（印刷し部分的なページを配布する、誤字があったなどの理由で新たにテキストを起こし、修正するなども禁止）
- ・ その他、原作者たる涼元悠一の著作権を尊重すること。

Copyright © 2006 Yuuichi Suzumoto. All rights reserved.

夢の中にはお姫さま

涙に濡れて 蒼ざめた頬

菩提樹リンデの木陰に腰かけて

心向くまま抱き合って

「王の玉座も 黄金こがねの笏しやくも

金剛石の冠かんざんも

わたしは欲しくありません

ただあなただけ かわいいひと」

『詮無せんむいこと』とお姫さま

『わたしは冷たい墓はかの中

夜を待ちわび 抜け出した

愛しいあなたに逢あうために』

Aus Lyrisches Intermezzo von Heinrich Heine

エルサレム郊外 イスラエル 深夜 一九八三年

「止まれ。休憩だ」
声が響いた。

半島訛りが覗くアラビア語、男のものだ。
三人分の靴音が止まり、静謐が戻った。
乾き果てた荒地だった。
なだらかな丘陵のなかに、井戸が涸れ、放棄された集落がある。
とうに夜半を過ぎている。

頭上には星原がある。

偉大なる救世主、あるいは偉大なる予言者が、彼の使徒たちと共にこの地を訪れた――
以来、時は歩みを忘れたのだろう。

そう思えるほどに、謐かな夜だった。

崩れた石垣の列が星明かりに洗われている。

三人は少しずつ離れて座り、無人の家壁に背を預けた。

全員がアラブ人だ。

頭巾に隠れた浅黒い顔に、それぞれ立派な口髭をたくわえている。

南にオリーブの木立がある。

その向こうは、一面の荒地野だ。

斜面を右に下れば、テルアビブに抜ける自動車道に通じるはずだった。

「10万ドルだぜ、10万ドル。ちょろい仕事だなあ、まったく」

二つ目の声が言った。

こちらは強いネゲブ訛りだ。

息はまだ荒いが、興奮の方が上回っている。

「全部おまえのものってわけじゃねえ」

うんざりといった様子で、三つ目の声が戒めた。

「売値が10万ドルなら一人あたたま3333ドル33セント、おまけに交渉次第じゃ三人まとめて蜂の巣にされたっておかしくねえ」

「景気の悪いこと言うなって。これから三人で金持ちになろうって時にさあ」

言いながら、男は懷に手を入れ、なにかを取り出した。

懷中時計だった。

大きさはちょうど手のひらに乘せられるほど。

自動巻機構、完全永久暦、均時差計、動力残量計、金属寒暖計……

透明な文字盤の下、籠めうるかぎりの複雑機構を与えられた精密齒車が慄えている。

色濃い夜陰に抱かれてさえ、全ての部品は狂おしいような黄金色を放っている。

迷子になった星の欠片。

ひそかに覗き見る者があれば、そう喩えたかもしれない。

「これっぱかりの金時計さまが、行くところに行きやあ10万ドルだぜえ？ 下っ端にやあ駄賃払

つてお払い箱って算段だろうが、そうはいかねえって話さ」

「汚い手で触るな」

最初の男が短く言った。

油断ない雰囲気からも、彼が首謀者だと窺える。

今のところ、追っ手の姿はない。

同時に盗み出した他の時計たちは、契約通りそのまま車に残してきたが、不幸な手違いによってその中に本命は入っていないという筋書きだ。

これから起こるであろう不愉快ないざごさを考え、いくつかの手も打ってある。

ともあれ数ヶ月後、彼は単身どこか異国の保養地にあつて、金時計と引き換えに100万ドルからの札束を手に入れているはずだった。

「なあ、兄弟」

二番目の男が、ふたたび口を開いた。

「俺たちや、組むのはこれが三度目だけだ、ばっちり息が合ってたよなあ」

彼は上機嫌だった。

金時計はたしかに自分の掌中にある、何よりそれが大切なことだ。

それに、ここから南の土地は彼の庭のようなものだ。

たとえ追っ手がかかったとしても、見つかることはないだろう。

「そうだな、大した手際だったさ」

三番目の男が、気のない風に相槌を打つ。

「鉄砲もぶっぱなさに済んだしなあ」

「ああ、一発も撃たなかったな」

「やっぱりよ、殺しはいやなもんだからなあ」

「そうだな……」
彼は答えた。

脇の下に吊った45口径の重みを、それとはなしに意識する。
その通り、神のご加護^{アッラー}によって銃撃戦にはならなかった。

だから彼の銃には、弾倉と薬室合わせて八発の弾丸が、そっくりそのまま残っている。
装弾数の差はあるにせよ、仲間たちの銃もそれは同じことだ。

その気なら、ここで腕比べをすることさえ可能だろう……

「こんばんは」
声^{ボンソワール}が響いた。

若い女の声だった。

「なんだあ!？」

二番目の男が、素っ頓狂な声をあげた。

とつさに銃を抜こうとし、時計を取り落としかける。

他の二人はとうに銃をかまえていた。

「出てこい!」

声のした方に注意深く銃口を射し向け、一番目の男が言った。
するり――

闇の色が乱れる。

女が現れた。

土地の者ではなかった。

ほっそりとした長身に、行儀よく結った黒髪を夜気にさらしている。

美しい女だ。

品のいい濃緑色の外套が、女と夜との境をあいまいに保っていた。

左手に懐中時計を握りしめたまま、二番目の男もどうにか銃を取り出した。

その目前まで歩み寄ると、女はしとやかに微笑みかけた。

「お会いできて光栄に存じます^{トレズルースドゥ・ヴゾワール}。マドモワゼル・サンソワサント」

女は言った。

美しいアクセントのフランス語だった。

その意味も、意図するところも、男たちにわかるはずがない。

「何だ、こいつ？ 何を言ってる――おい、おまえの女か？」

「ち、違わあ……」

「おい、何のつもりだ？」

女は答えない。

悪魔を寄せる呪文のように、異国の言葉を蕩々^{とつとつ}と語り続けている。

「こいつ、気狂いか？」

三番目の男が女の背後に回り、首筋に銃口を突き付けようとした。

「お静かに。^{わたくし}私たちは大切な交渉をしているのです」

女は振り向き、冷然と言い放った。

完璧なアラビア語だった。

「こいつ！」

「撃つな、気をつける」

「……ああ、わかってるさ」

銃口を向け合い、互いに警戒を送り合う。

ほんの少し狙いが逸れれば、仲間に当たるかもしれないのだ。

男たちの様子を気にも留めず、女はふたたび言葉を切り換え、先を続けた。

「この盗賊たちはここで仲間割れをし、二人が死にます。深手を負った一人がこの場を逃れ、いずれ取りに戻るためにと、あのオリブの根元にあなたを埋めます。しかしながら、あなたは二度と掘り起こされることはありません。この象限におきまして、それがあなたの運命です」

甘やかな音楽じみたフランス語の水流に、尖った小石のように異国の単語が混じった。

運命^{シッザール}、と。

「今宵は新たな勤め先をご紹介にあがりました。私にご同行いただけますでしょうか？　どうか

ご返事を」

女は言葉を終えた。

貴人を前にしたかのように、その場で跪く^{ひざまず}。

口も聞けずにいた二番目の男が、大きく目を見開いた。

「どうかしてる……」

彼はようやく悟った。

この女が話しかけているのは、自分たちではない。

自分たちが美術館から盗み出してきたばかりの、この懐中時計に話しかけているのだと。

残る二人の男たちも、銃をかまえたまま動かない。

息詰まる沈黙が、夜の杯^{さかずき}を満たしていく。

刹那。

ろん、ろん、りんろん、りんろん、りんろん……

かるやかな響きが零れた^{こぼ}。

「なんだ？　何の音だ？」

「くそつたれめ、そいつだ、そいつを止める！」

「お、俺あいじつちやいねえ……」

りん、りん、りん、りん……

それは、超複雜懷中時計が闇夜に時を報せるための、引き打ち時鐘の調べだった。
どんな大寺院の鐘楼にも真似できない、気品と愛慕に満ちた響き。

好事家の金庫や無慈悲な展示ケースの中であって、長らく役目を忘れていた響き。
りん、りん、りん、りん、りん、りん……

全ての贅を極めつくし、それゆえ誰より孤独だった王妃の傍にはべる、ただそれだけのため
に設えられた乙女の歌声が、一世紀の時をへだて、異郷の丘に朗々と響きわたっていた。

……りん、りん、りん。

そして、時鐘は終わった。

「承知しました」

女は頷くと、おもむろに立ちあがった。

最初の銃声が轟いた――

Die Nachtjäger

ナハトイエーガー

Freyja von Lindenheim
菩提樹荘の闇狩姫

1

螺旋階段を上っていく。
ぐるぐると、ぐるぐると、廻るように、踊るように。
その先に、彼女は待っていた。

どこにでもあるような、雑居ビルの屋上だ。

酸性雨と排気ガスで薄汚れた外壁、十階建てほどの素っ気ない長方体。JR 駅前北口に続くぎやかな表通りから離れ、いくつか路地を曲がった先、いまだ区画整理されていない街区の真ん中に、同じような境遇のビルたちにかくま匿われるように建っている。

非常階段の錠前が壊れ、役目をなしていない。

そんなちよつとした秘密に恵那えなが気づいたのは、もうずっと前のことだ。

部外者が勝手に上つていいわけではない。

上ったところで、特別なものがあるわけでもない。

四角く切り取られたコンクリートの土地が、胸元ほどの高さのフェンスに囲われている。味も素っ気もない、クツキー缶の底のようにからっぽな空中庭園。

学校帰りの夕刻、制服に鞆という格好のまま、恵那は五分から小一時間ほどこの屋上にたたずみ、とりとめのない思いを巡らし、素知らぬ顔で雑踏に帰る。

この日も恵那は理由なく、ひとりを愉たのしむはずだった。

『先客』の姿に気づくまでは。

——だれか、いる!?

とっさに身を隠そうとして、視線を釘付けにされた。

外国の少女だった。

年の頃は……きつと十歳ほど。

首筋まで隠した古風な黒絹のワンピースに、華奢な身体をふわりと包んでいる。

袖から覗く手首が、真冬の霜のように白い。

足元は、編み上げ紐の短いブーツ。

幅広の黒いリボンを巻いた藁帽子を、頭にちよこんと乗せている。

さらさらの長い髪は透き通るような白ブリチナフロント金色。日本人の髪をあとから加工しても、あんなに美

しく澄んだ色は絶対に出せないだろう。

お人形みたい……

あまりにも陳腐な発想に、恵那は軽く恥じ入る。

目前に広がる街並みを、少女は身じろぎもせずに見つめている。

五月の夕暮れの中にあつて、その姿はまるで、おとぎ話の姫君のように現実離れしている。

と、少女がこちらに気づいた。

銀色の瞳が、学生鞆に襟なしブレザー姿の恵那を、どこか物憂げに射る。

まともに見つめられると総毛立つほどに、少女は美しい顔立ちをしていた。
なにか言わなければ、とっさにそう思った。

「えっと、こんにちは……じゃなくて、こんばんはかな？」

少女は礼儀正しく恵那に向き直ると、スカートの裾を軽く整えてから、答えた。
グリーティング

「こんばんは」

異国語の挨拶。

金属の鈴がちりと響くような、綺麗な声色だった。

「なにかご用かしら？」

「りゅうちよう流暢な日本語。」

「用ってわけじゃないんだけど……」

意思が疎通できている事実にもしろうるたえながら、恵那は言葉を探す。

「ええと、淋しそうだったから」

「あなただって、淋しそうに見えないこともないわ」

少女はそう応じた。

「そうかな？」

「そうよ」

「となり、いい？」

「ご自由に」

恵那は屋上の縁に歩み寄り、手すりを軽く両手で握った。

並んでみると、少女の背が自分の胸あたりまでしかないことに、なぜかどぎまぎしてしまう。

少女の方は、恵那の存在をあまり気にしていないらしい。

「ここはどこかしら？」

つぶやくと、象牙細工のような細い指でスカートのドレープをまさぐる。

そして、なにかを取り出した。

彼女の瞳と同じ、銀の懐中時計だった。

慣れた手つきで外蓋を開け、文字盤を覗き込む。

「どうやら、待ち合わせをちが違えてしまったようね」

「待ち合わせ？　ここで？」

訊き返したが、少女は答えない。

真剣な顔つきで、ただ時刻を確かめている。

恵那はそれとなく彼女の時計を盗み見て、目を丸くした。

外見はごく普通の、少し小振りな懐中時計だ。

ケースの周囲だけでなく、蓋の内側も、紛失防止用の鎖まで銀色で統一ブラチナされている。

文字盤は闇夜のような漆黒。

だが、中心に据えられているはずの長針と短針、それに秒針がない。金色と銀色の針が方々にあって、てんでばらばらの速度で動いている。針の動く範囲が扇形をしているものもあるし、円形のものもある。それぞれに指^{インデックス}標は刻まれているが、なにを計^{はか}っているのか、恵那には見当もつかない。

下方に円形の窓があり、内部の機械構造をそこだけ露出させてある。

文字盤のいちばん外周には、髪の毛よりも細い針金で何重にも螺旋が形作られている。

まるで占い師が星々の運行を知るための、特別な装置のように見えた。

「その時計、変わってるね」

「シュピラルウーア」

ふたたび、鈴の音が答える。

異国の言葉、はじめて聞く言葉。

なのになぜか、その意味するところはわかった。

「らせんの時計？」

頷くかわりに、彼女は小さな微笑みをこぼす。

……不思議の国から来たの？

よほどそう訊こうと思ったけれど、黙っておいた。

真顔で『そうよ』と頷かれたら、どう応じていいかわからない。

少女は時計の蓋をきちんと閉じ、元通りに仕舞うと、言った。

「ここは息が詰まりそう。人も物も、出鱈^{でたらめ}目に増えすぎているわ」

「そうかな？ わたしはここ、好きだけど」

それきり会話が途切れた。

仕方なく、恵那は手すりに両肘を置き、いつものように風景を眺める。

金曜夕方の、まさにラッシュアワーだった。

駅前ロータリーの辺りは、帰宅する人や車でごった返している。

都心までなら充分に通勤圏内。いくつかのデパートも商店街も映画館も美術館も、一通りのものは揃っている。こぢんまりとした住みやすい都市だ。

視線を遠ざければ、国道からのバイパスと私鉄の高架が交差する向こうで、夕日に染まった住宅街の屋根はやがて、なだらかな丘陵に飲み込まれていく。

その麓^{ふもと}に、白河総合病院の新棟が客船のように横たわっている。

十七年と二ヶ月と少し。

白河恵那はここ、宮^{みや}雑^や市で暮らしてきた。

それは恵那が今まで生きてきた年月と同じだ。

父親は大きな私立病院の院長、いわゆる地元の名士でもある。

創業者である祖父に会ったことはなく、祖母も恵那が幼い頃に亡くなった。ひとりっ子である

恵那は、多忙だが娘思いの父親と、厳しくてやさしい母親の元で、何不自由なく成長してきた。学費が高い名門私立校に通えているのは両親のおかげだと自覚している。

だからこそ、進学は県内ではなく、遠くの大学でできるだけ自活したいと思っている……

そんなことを彼女に言っただけで聞かせても、きつと無駄だろう。自分が十歳かそこらだった頃、世界はまだうんと広くて、知らないことはいっぱいだった。早く大人になりたかったし、大人になんかなりたくなかった。

少女の整った横顔をうかがう。

背伸びした風をつくっているくせに、やっぱりどこか心細そうに見える。

この子はなぜこんなところに、ひとりでいるんだろう？

たとえば、迷子、とか。

親とはぐれて探し歩いているうちに、辺りが見通しなくなつて偶然この屋上に上った。ありえないことではない。

「ねえ、ひとりで大丈夫？」

恵那は腰をかがめ、少女にそう訊いた。

「ほら、もうすぐ日が暮れるから」

「昼と夜の境目をご存じ？」

まったく出し抜けに、少女は言った。

「えっと……日が沈んだら、夜？」

「違うわ」

少女は首を振った。

「闇が遊びをはじめるのが、夜」

「でも、遊ぶのは昼間にしないと」

「あなたはなぜ、ここに来たの？」

「ええと、カギが開いてたからんだけど」

「あなたは錠かぎが開いてさえたいたら、かならず中に入るのかしら？」

咎める口調ではなく、面白がる口調。

「そうかも……」

神妙に答える恵那。

これじゃ、どちらが年上かわからない。

「闇はだれと遊ぶのか、知っていて？」

「わからないけど」

「ならあなた、幸せね」

「そうなのかな？」

「そうよ」

意味のわからない謎かけの言葉たち。

いびつなピンポン玉みたいに、跳ねて転がるばかりの会話。
宵闇をたつぷりと孕んだ風が、ふたりだけの屋上を吹き渡っていく。

白金色をした少女の髪と、恵那のボニーテールに結んだ白いリボンとが、それぞれの影をともなつてざわざわと揺れていた。

「あなた……」

そつと首を傾げるような仕草で、黒衣の少女は恵那に問う。

気を許せばそれきり戻れなくなりそうな、宝玉めいた銀の瞳が、恵那の姿を映し込む。

「わたしを愛でてくださいるかしら？」

——え!?

聞き返そうとした、その時。

少女は爪先立ちになり、恵那の唇にそつと口づけをした。

2

「かくして我らが白河恵那は、謎の金髪美少女にまんまと貞操を奪われてしまいましたとさ、と」
「そそそそつ、そんなんじゃないって言ってるのにつっ!」

土曜曰。

私立芙蓉館高等学校三年A組教室。

四限目の英語が終わり、HRが始まるまでの空白。

白河恵那の周辺がにわかに盛り上がっている。

登校した時から、恵那はまったく上の空だった。

公式も年号も両耳を素通りしていき、意識は今も、夕暮れの屋上に置き去りにされたままだ。
だれかに話すつもりはなかった。ただ、あの少女とのやりとりが、頭の中をぐるぐる回り続け
ていて……

思いあまつた恵那は、身近な助けにすぎた。

クラスメート兼親友兼悪友の三朝木奏に、それとなくこう訊ねたのだ。

「キスつてさ、外国だとただの挨拶がわりだよな？」

思えば、なんと軽率だったことか。

さして必要のない語学の授業中、ずっと寝呆けていたであろう学年一の才女は、たつぷり十秒

以上恵那の顔を眺め続けた。

そして、緩くウェーブのかかった栗色の髪をかきあげ、こう指摘した。

「それはつまり、わたし外国人に唇奪われちゃったけどどうしたらいいかな？ って質問と受け取っていいのね？」

「ちがうつつ！ いっきなりなに言ってるのよっ！」

否定する恵那の頬が呆れるほど真っ赤なもの、火に油を注いだ。

やりとりを聞きつけたクラスメイトたちが、砂糖に群がる蟻のように押し寄せてきた。

五分後、事の次第をあらかた自白させられ、あわれ絞り滓と化している恵那がいる。

「ねーねー恵那っち、ほんとのところ、その後どうなったわけ？」

「ほんとにどうもなっていないから。すぐにビル降りて、家に帰って、それっきり」

「んなわけないよねー」

「ねー」

「だいたい、剣道部長をふった時点でおかしいとは思ってたけど、こういうことだったわけね」

「そんな終わった話まで持ち出さないでよっ！」

「あー、もう終わったつもりでいますよ、この人は」

「うん。今でもあれは恵那がひどいと思うし」

「^{オトコ}男子が貴重なうちの学校で、かなりイケてる男に向こうから告白されて断るってのはねー」

「しかも彼氏がいたわけじゃないっていうんだから、そりゃ男嫌いって思われてもしかたないよ」
「真性の百合な人だったのかー、そっかー、それで全部納得いくもんねー」

明るいグレーのチェックスカートとイートンブレザー、ラウンドカラーのブラウスの胸元に薄茶色のリボン。清楚と評判の制服に身を包んだ『良家の子女』たちが交わす、率直すぎる感想、講釈、注釈、歓談、猥談、エトセトラ、エトセトラ。

カタブツ恵那の唇を奪った相手が美男子ではなく、外国人で年下の美少女という見事すぎるオチが、時ならぬ艶話の狂い咲きに滋養を与えている。

「一目惚れされたんだって、間違いないって。もうあきらめて添い遂げてあげなよー」

「同感。外国の人らって、こっちじゃ想像できないくらいマセてるっていうしさー」

「ほんで、結局その子ってなんなん？」

群衆の興味を代表して、のほほんとした関西弁が訊ねた。

お調子者でゴシップ大好きな関西出身者、今福手鞠^{いまふくてまり}だった。

「っていうか、なんで手鞠が混じってるのよ！ あんたD組でしょっ！」

「メールもろたんよ、奏から。『恵那がおもろいから今すぐ来い』って」

「あああああ」

頭を抱える恵那。

奏の必殺技、机の下でブラインドメールだ。

にこやかに会話している最中さえ、彼女の掌中を発信基地にして情報は光速で伝播していく。
 「知り合いにもできる子おるけど、奏は逆持ちで本体隠してしよるからスゴいわー」
 「たゆまぬ修練のたまものですわ、おほほほ」
 愛用の携帯端末を拳銃ばりにくるくるっと回し、わざとらしく笑う奏。

「かゝなで」

「相談料がわりの余興よ。気にしない気にしない」

「気にするわよっ!!」

「だいたい、朝イチから『色ボケ中です』って雰囲気全開であたしの前に座ってる時点で、噂になるに決まってるんだから、下手に尾ヒレつけられるより自分で全部説明した方が得だつて」

「……わたし、そんな風に見えた!？」

「えーえーそりゃもう、完膚無きまでに」

「わたしもそう思ってたー」

「まあなんかあつたんだろうなとは思ってたけどさあ」

周りの見物人一同も、てんでに同意している。

「……………」

恵那にはもう反駁の言葉もない。

本当に、自分はもうしてしまったんだろう？

態度に出てしまっているかさえ、気にしている余裕がなかった。奏に相談するにしても、もつとふさわしい場所もタイミングもあつただろうに。

ホームルームのチャイムが鳴った。

「あー面白かった」

「やっぱりこういうイベントがあると退屈しなくていいよねー」

ひとしきり騒いだ生徒たちが、勝手な総括を言いながら自分の机に戻っていく。

恵那も溜息をつきつつ椅子を引いて、黒板の方を向こうとした。

「ちょっと、最後にひとつだけ忠告」

びしつとこちらを指さしながら、後席の奏が言う。

「そういうビルにひとりで上るって、危ないから気をつけなさいよ」

「うん。今度会ったら、言っとく」

何気なく答えてから、奏と手鞠が顔を見合わせているのに気づいた。

「色ボケもここまで来ると壮観ねえ」

「ホンマやねえ……」

「なによ？」

「その子のこともいいけど、まず自分の身を心配しなさいって言ってるの。わかる？」

「恵那みたいな可愛いジョシコーサーがそんなとこひとりでおったら、あとつけられて手籠めに」

されても知らんで、ってことやわなあ」

「まあ、唇に関してはもう手遅れなわけだけど」

「いいからもうほつといてよ……」

前の引き戸が開き、担任教師が現れた。

「よし席に着けー」

「わわわ、あかんっ」

手鞠が腰を丸くかがめて、こそこそとA組を出て行った。

「きりーっ、礼っ、ちやくせーき」

日直が号令をかけ、ホームルームが始まった。

特別な連絡事項があるわけではない。

中間考査のことと、授業中のメールについての注意、代わり映えのしない雑事の羅列。

「それから、言わなくてもわかつていると思うが……」

担任が『知らない人についていけないように』と大真面目に言い、生徒たちから不満と笑いがある。

二ヶ月ほど前、隣の市で大きな事件があった。

小学校にあがったばかりの女の子が、変質者に誘拐されて、警察の必死の捜査にもかかわらず遺体で見つかった。犯人は逮捕されたが、それ以来、この界隈の大人たちは些細なことにも神経

を尖らせている。

それに、この学校の生徒は裕福な家柄が多い。しかも、二年前までは女子校だった関係で、今も全校の八割が女子、おかげでA組のように男子が皆無というクラスさえある。学校側が気にするのわかるが、当の生徒たちは過剰反応もいいところだとうんざりしている。

……あの子は、大丈夫だよな？

意志の強そうな瞳の色合いと、大人顔負けの話しぶりを、またも思い返してしまう。

それに、時折混じる異国の言葉。

外国に住んでいたんだらうか？ 日本に來たのは最近なんだらうか？

突然の口づけの意味が、どうしてもわからない。

きっと、外国ではああいうものなんだ。でも、会ったばかりの相手にいきなり？

それとも、全部夢だった、とか……

昨夕から何度繰り返したかわからない、堂々巡りがくるくる回る。

次に気がついた時、ホームルームは終わっていた。

掃除当番が机を動かしたそうにしているのを見て、恵那は鞆を取って席を立った。

その真後ろで、奏が腕組みをして待っていた。

「重症ねえ」

「うん……」

「今日、部活出る？」

「うん、一応。自由練習だから軽くしとくけど」

「じゃあ、あたしは先に帰るね。ヘンなもの射らないように、気をつけなさいよ」

「わかった、ありがと」

「じゃあね」

ひらひらと手を振って、奏は戸口に向かおうとする。その背中を恵那は呼び止めた。

「あつ、もうひとつ、いい？」

「なに？」

聞き耳を立てている者がいないかどうか、そつと確認してから、奏の耳に唇を近づける。

「ぐーてんどーにかつて、どこの言葉だっけ？」

呆れ顔を返す奏。

博覧強記で鳴らす彼女にとっては、かなりげんなりさせる質問だ。

「十七年も普通に生きてれば、なんとなくでもわかりそうなものだけど」

「わかってたら聞かないよー」

「まっ、いいけどね」

自慢の髪を指で梳くようにしながら、愛すべき親友に答えた。

「ドイツ語よ。グーテンタークがこんにちはで、グーテンアーベントがこんばんは」

「おはよーございますーす」
「ういーっす」

部室のプレハブに顔を出すなり、ぞんざいな返事がひとつ出迎えた。

弓道部現部長、大島喜久世おおしまきくよだった。

身長167センチの堂々たる体躯。雄ライオンを想起させる豊かな髪を、前衛生け花のように頭の後ろで回し束ねるのが、彼女のトレードマークだ。

それが今、射的屋のおばさんよろしく、購買のハムカッドッグ片手にパイプ椅子にだらりと腰かけ、卒業生が残っていた漫画本をつまらなそうに眺めている。

「もう百回ぐらい読んでない？ それ」

冗談めかして恵那が訊くと、椅子の上でふんぞり返りながら答える。

「甘いね。五百回は読んだ」

公私ともに女傑で鳴らす我らが部長は、進級早々自転車で転んで右腕をへし折り、やっとギプスが取れたばかり。弓を引くことは当然許されていないし、それでなくてもなにかと無茶ばかりする御仁なので、完治までは愛弓を取り上げ、部員一同でここに軟禁している。

「今、だれが入ってる？」

窓から見える弓道場を親指で示しながら、恵那は訊ねる。

「射場は凜々子ちゃんだけ。佐竹氏とさねっぴは休み、あとは来るとしても昼食べてからっしょ」
第二及び第四土曜日は、建前上は部活動禁止の家庭活動日だ。部長の喜久世が詰めているから弓道場は自由に使えるが、大っぴらな共同練習はできない。

「凜々子ちゃんかあ。なんか最近熱心だよな、彼女」

「あこがれの白河せんばいのお仕込みがいいからねー」

「うん。わたしも抜かれないようにしないとね」

お馴染みになった冷やかしをさらりと受け流す。今は少しでも早くの向かいたい。

そんな恵那の気持ちを汲んでか、部長はにやっと笑うと、調理パンの残りを手早く飲み込んだ。

「あと、わたし今日接骨医だから、道場三時閉め。悪いけど」

「わかった。それじゃ、ちよつと引いてくるね」

鞆を置き、更衣室に向かおうとした恵那に、喜久世が後ろから声をかけた。

「例のアレの件だけどさ……」

「うん」

「わたしもキツク言いすぎた。機会があつたらそつちから彼女に言っといて」

思わず耳を疑った恵那。

あの正義と真実の大島部長その人の口から、こんな殊勝な言葉が出てくるとは！

「もしかして、骨折して性格丸くなった？」

「骨つながつたら元に戻る予定」

両手を広げて胸を張り、会の姿勢から弓手に俯角をつける。

あながち軽口でもないな、と思った。

「治つたらまた遠的に行こうね」

「望むところ」

にかつと笑って答えた。

ポニーテールを解き、白いリボン^{ほど}を黒のゴム紐に取り替える。
足袋^{たび}に道衣、紺袴、胸当てを身につけた。

射場に足を踏み入れる。

ぴんと張りつめた板の間の空気が、頬に心地よかった。

神棚に一礼。

弦を張り、矢立から愛用の矢を四本摘む。妻手^{めて}にかけを着け、ぎり粉で具合を整える。

揖、そして射位につく。

姿見の前で、二年生の水縞^{みずしまりこ}凛々子が黙々と数矢を引いている。

彼女も道着姿だ。入部した当初はどうなることかと思つた射形も、今は板についている。

軽く黙礼すると、あわてた風にぺこりと頭を下げた。

高校の部活動としては整った設備も、校内自治領とまで呼ばれる独特の雰囲気も、幾多の先輩方が培^{つちか}ってきたものだ。

普段はどんなに馬鹿をやつても、道場内では常に礼節を重んずる。

最上級生になつて、自分もそうでありたいと思う。

的前に立つ。

二十射を一度だけ行うことに決めた。

さつきまで揺れていた心が、すうつと平らかになっていくのがわかる。

よく手入れされた矢道の芝、その28メートル向こうに、黒白に塗り分けられた霞的がある。足踏みから胴造り。

矢を番え、呼吸を整え、的の方向に視線を定める。

ゆっくりと打ち起こす。

引き分け。

会。

そして、離れ。

弦音^{つるね}に乗ってわずかな弧を描き、矢が霞的を目指す。

ぱあん……

真新しい的を射た時だけに聞ける、あの心が真っ白になるような響き。

余韻を味わいながら、残心を終える。

霞的の同心円、その中央に的中していた。

急ぐことも淀むこともない、一定のペースで引き続ける。

一の立^{たち}、皆中。

八射目が的枠に弾かれた。

十二射目がわずかに弛^{ゆる}み、安土^{あづち}に突き刺さった。

だが、集中は途切れない。

四立目はふたたび皆中を得た。

矢取りのタイミングを凜々子が合わせてくれるせいもあって、調子よく引けている。

……ぱんつ。

また的中の音が響く。

これで十九射十七中。

最後の一射。

弦を引き絞り、頬付けに保ったまま会に入る。

矢が放たれようとした、その瞬間だった。

霞の下、盛り上げられた安土の前になにかがぼうつと浮かびあがった。

手のひらほどの、鮮やかな紅い影。

四肢を磔にされた、人のかたちをしている。

紅い手、紅い脚。

紅い顔。

目も、鼻も、口もない。

なのに、笑っている。

こちらを見て、笑っている。

——えっ!?

とっさに弦を戻そうとしたが、間に合わなかった。

手元が狂ったまま、矢が放たれた。

それは大きく前に抜け、安土に斜めに突き刺さった。

心臓がどくどくと打ち付けている。

落ちて着け、落ちて着け、落ちて着こう……

弓をおさめ、深く呼吸し、辺りを見回す。

「凛々子ちゃん、今の……」

「……はいつ!？」

よほど集中していたらしく、素っ頓狂な声が返ってきた。

「あっ、ごめん」

もう一度、恐る恐る、安土の方を見る。

紅い影は消えていた。

弓道部を後にした時には、もう午後遅かった。

「せんばいつ、白河せんばいつ！」

通用門に向かうところで、背後から声をかけられた。

おかっぱ頭を揺らしながら、制服姿の凜々子がばたばたと駆けてきた。

「凜々子ちゃん、お疲れ」

「はいっ、お疲れさまですっ」

バネ仕掛けの面白い玩具みたいに、ぺこんと礼をする。

道場での凜々しい姿から、もうきやぴきやぴな下級生に戻ってしまっている。

「白河せんばい、あの、新しくできたクレープ屋さん、もう行きました？ わたしたちこれからみんなで行くんですけど、あの、もしよかったら……」

「クレープ屋さん？ どこ？」

「黒金町の方っていつか、ツタヤのとなりです。安くって、フルーツがフツーじゃないぐらいたくさん入ってて、すごい行列できてみたいですよ」

「駅の方か……」

部活での誘いはできるだけ断らないようにしているけれど、特段の用事がないかぎり、恵那にとっては遠回りだ。

たとえば、あのビルに上る時とか……

またも意識を持っていかれそうになり、恵那はぶんぶんと首を振る。

「うん。じゃあ他の三年も……って、部^{おーちゃん}長病院だし、行けそうなのってわたしだけか。佐竹さんとか泉ちゃんとか、せつかくだから一応メールしてみよっか？」

明るく答えはしたものの、逆に空々しい感じになってるかな、と思う。

凜々子は大きくて黒目がちの瞳で、じーっと恵那を見つめている。

それはいつものことなのだが、いくらなんでも凝視されすぎで、顔に穴が開きそうだ。

「……？」

恵那がなにか訊こうとした時、凜々子は唐突にびっくりした顔になった。

「すみませんっ！ あの、わたし今日ちょっと用事があるの忘れてました！」

ぺたんこな胸の前で、お祈りみたいに両手の指を組み合わせながら、すごい早口で言う。

「あ、そうなんだ……」

内心少しほっとしながら、恵那は答える。

「わたしから誘っておいて、すみません、ほんとにすみませんっ！」

「ううん、いいから。また誘ってね」

「はい、ぜったいぜったい誘わせていただきますっ！」

「うん、楽しみにしてるから」

「はいっ。お疲れさまでしたーっ！」

他の二年生にも中止を伝えに行くんだろう、全力で駆け戻っていった。

「今日はなんかテンション変だなあ、凜々子ちゃん……」

面白い玩具というより小型のフリスビー犬かも、などと失礼なことを思う。

今日だけは、慕ってくれる『^{まなでし}愛弟子』もちよっとだけ重荷だった。

恵那はまた歩きはじめた。

慣れたはずの道。

もう何百回往復したか、わからないはずの道。

この時間では、恵那の他に下校している生徒はいない。

小さな電器店の角を折れ、歩道に停められたスクーターを避けながら、恵那は歩を進める。晴れ渡った空。

五月の光、五月の風。

だれもない児童公園で、ふたつ並んだブランコが人待ち顔をしている。

緑のままで落ちた葉が、コンクリート堀の下、排水溝に吹きだまっている。遠くないところに、夕暮れの気配がする。

「どうしちゃったんだろうな、わたし……」

自然にそんな言葉がこぼれる。

授業の内容なんて、全然頭に入っていない。世間体とか評判とかまるで考えず、夢の中にいるみたいに振る舞ってしまった。挙げ句、^{ぎょうしゃ}行射の最中に声をかけて、後輩の邪魔までしてしまった。

あんな光の錯覚かなにかで、あそこまで動揺してしまうなんて……

散々な一日の中でも、これがいちばん情けない。

国道に出る手前の角で、恵那は立ち止まった。

「こっち」

電車の運転手のように、指さし確認する。駅前には行かず、まっすぐ帰るという意思表示だ。くるつと左を向き、いつもの路地に入った。

ご飯つくって、お風呂入って、できたら勉強して、早めに寝よう。

「……その前に、なんかお菓子買って帰ろっかな」

ファミマのデザートで済ませるか、ちよっと遠いけどラパン・サージュか扇屋までケーキ買いに行こうか……

そんなことを考えつつ、何気なく角を曲がった時だった。

「あれっ？」

目の前に、知らない路地があった。

両脇は飾り気のない生け垣。軽自動車がどうにか通れるほどの広さしかない。

学校から恵那の自宅までは、普通に歩いて二十分と少し。通れそうな道に出会えば片っ端から挑戦してみる恵那だ。この辺りなら、たいていの路地は知っている。

記憶にないということは、たぶん行き止まりだったんだろう。

でも……

行ってみよう。

そう決めるのに、時間はかからなかった。

最初に考えたよりずっと奥まで、その路地は続いていた。

いつの間にか、左側の垣根が高い煉瓦塀に変わっていた。

かいだことのない花の匂いにする。

夢の中を歩いているような、ふわふわとした感覚が戻ってくる。

最後にだれかとすれ違ったのは、いつだっただろう？

ずっとひとりだけで、この道を歩き続けている気がする。

道なりに角を曲がると、やがて煉瓦塀が途切れた。

門があった。

細い蔦を複雑にからませた、鉄格子の大きなアーチ扉。

何気なく中をうかがって、恵那は思わず足を止めた。

「うわあ……」

石造りの、大きな洋館だった。

中央に城の見張り台のような出っ張りがあり、そこから左右に翼を広げるように、深緑に塗られた屋根が続いている。

三階建校舎をうんと瀟洒に改装し、ヨーロッパの宮殿風にしたという感じだった。

ずらりと並んだ格子窓は、鎧戸こそ開いているものの全てカーテンがかかっている。

門から屋敷の表玄関まで100メートルほどの間、雑草が生い茂っている。

人の気配はない。

……どこかの会社の研修所とか、そんなのかな？

それにしても、建物全体のたたずまいが上品すぎる気がする。

門柱を確かめても、表札のたぐいは見当たらぬ。

恵那は何気なく扉に触れた。

ぎい……

「ちよつがい」
蝶番のきしむ音と共に、左のアーチ扉が動いた。

それはちょうど人ひとりが通れるだけの隙間をつくり、止まった。もう一度、辺りを見回してみる。

恵那以外はだれもない。だれも見えていないし、だれも気づいていない。

……個人の家じゃないだろうから、玄関までならいいよね。

言い訳にならない言い訳をし、中に踏み出した。

ただ放置されているだけに見えた前庭は、まったく様子が違っていた。

中央に睡蓮すいれんの浮かんだ丸池があり、その脇になだらかな弧を描いて続く小径があった。

進んでいくと、ところどころに小さな花がほころんでいる。白い花弁と薄青色の花弁が交互に現れ、招かれざる訪問客の目さえ楽しませる。

自然にそうなったのか、丹念な手入れの結果なのか、恵那にはわからない。

ただ、なにかの意志が働いているような、不思議な感覚があった。

玄関に着いた。

踏み段を上がると、普通の住宅とはサイズからして違う、立派な扉があった。重厚な木彫りの装飾が、お呼びでないという雰囲気漂わせている。

さすがの恵那も、これは勝手に開けられない。

引き返そうかと逡巡しゅんじゆんした時だった。

扉の向こうから、かすかに音楽が聞こえはじめた。

ピアノ？

違う。もつと音が柔らかく、素朴に複雑に響いている。

チェンバロとか、そういうもつと昔の楽器なんだろうけど……

恵那の知識では、そこまでしかわからない。だが、旋律にはたしかに聞き覚えがあった。

「きらきら星……」

正確にはそれは、古いフランス民謡を元にした即興演奏だった。

幼い節回しかかるやかで華麗な装飾グリスサン奏法をまとい、恵那の耳まで蕩々と流れてくる。

まだ楽器を習ったばかりで、演奏が楽しくて楽しくて仕方がない子供が、思う存分に腕前をふるっている様子が浮かんだ。

不意に演奏が途切れた。

早口の、ちよつと四角ばった感じの外国語が聞こえる。

小さな男の子と、女の子だ。

鍵盤をぼろぼろとあそびながら、男の子がなにか冗談を言っている。

女の子の方が、少しだけ年上なのかもしれない。やんちゃな演奏者にちよつと困ったように、でも上品に、嬉しそうに笑っている……

恵那は我に返った。

なのにまだ、夢見心地は続いている。

扉の脇に、獅子の口をかたどった真鍮製のノッカーがあった。
右手を伸ばし、それに触れた。

現実では決して行ってはいけないこと、あつてはならないことを試そうとしている自分を、クイズ番組の司会者みたいに眺めている自分がいる。

きつと、頭をぶつけたかなんかして、病院のベッドで夢を見ているんだ。
でも、ぶつけたのはいつだろう？

どこからが夢だろう？

こん、こん。

控えめに、でも強く、打ち鳴らした。

扉が開いた。

出迎えたのは、すらりとした長身の女性だった。

英国製のテレビドラマに出てくるメイドのように、踝丈の濃緑色の洋服と、真っ白なエプロンとを身につけている。

シンプルなヘッドドレスの下、結び上げられた髪の色は黒。鬢の一房だけを形のいい両耳からまっすぐ胸元に垂らしている。高く通った鼻筋に、瞳は淡い灰色。

年齢は……二十歳は超えているだろうけれど、単にたたずまいが大人びているからそう見えるだけなのかもしれない。つんと尖った、ちよつと気むずかしそうな雰囲気。

無言のまま、恵那のことを冷徹に見下ろしている。

「ぐっ、ぐーてん……」

とつさに言ったが、付け焼き刃では先が続くはずもない。そもそも、目の前の美人メイド嬢がドイツ人である確証もない。

だが、彼女はわずかに相好を崩し、答えた。

「こんにちは。ようこそいらつしやいました」

まごつく恵那に向けて、深々と礼をする。

「私は当家のメイド、ヒルデガルト・フォン・ファーパーと申します」

「えっと、あの……」

「どうぞ、ヒルダとお呼びください」

そう平然と言われても、いきなり対応できるものでもない。

「お荷物をお預かりします」

「あつ、はい」

なりゆきのままに学生鞆を差し出すと、ものすごく丁寧な仕草で受け取られてしまった。

「どうぞこちらへ。まだ屋敷内の片付けが終わっていませんので、お見苦しいところもあるかと存じますが……」

そう言われてはじめて、屋敷の中に目が行き……しばし言葉を忘れた。

ホールは三階分がまるごと吹き抜けになっていて、傾いた陽射しが静かに差し込んでいる。中央に大きな白磁の花瓶があり、季節の花々がたっぷりと、でも上品に生けてある。

壁のところどころには大小様々な油絵が飾ってある。オレンジ色や藍色など、少し沈んだ色調のものが多くのように思える。

メイドの謙遜とは裏腹に、床も壁もぴかぴかに磨きあげられ、塵ひとつ見当たらない。

奥には緋毛氈ひもうぜんの敷かれた広い階段がある。

それは踊り場からふたつに分かれ、半円状になって左右の二階に続いている。

「どうぞ」

階段の先を手のひらで示され、恵那も恐る恐る上りはじめる。

宝塚のレビユーなら、タキシードにステッキの面々がシルクハットを振りながら降りてくるんだらうなど、駄目な想像をしてしまう。

「あの、ここって……」

訊ねようとした時、また楽器の音が聞こえてきた。

今度は『カッサチオ ト長調』よりメヌエツト、現在では『おもちゃの交響曲』として知られる曲群のひとつだ。

素朴な音の重なりひとつひとつに微妙なビブラートがかかっているのが聞き取れる。まるで齧かじりつく前の林檎のように、音符を布で磨きながら弾いているかのようだった。

技量を悠々と誇りながら、演奏者はひとしきり主題を奏で、また不意に演奏が終わった。

そして、床をばたばたと遠ざかるふたり分の靴音……

それきり、なにも聞こえなくなった。

左翼の階段を上り切り、広い廊下に歩を進める。

そしてメイドは、ある部屋の前で止まった。

「お嬢様、お連れしました」

恵那のために、扉が開かれた。

三十畳ほどもある部屋。

品のよいアンティークの調度は、出自も年代も様式も様々だが、ただ誠実な職人仕事という一点において見事に統一されている。

書棚には立派な革装の洋書が並び、飛び石のようにいくつかの絹張りソファが置かれている。

貴賓室きひんしつなのだろう。

窓辺に置かれた楯背椅子へッベルホワイに、少女が腰かけている。

昨夕の旅装とは違う、胸元が大きく開いた薄手の黒いドレス。

あらわになつた鎖骨の下、膨らみはじめたばかりの両胸が生地をそつと押している。ペチコートさえつけていないのだらう、神話の少年のようにすくと落ちた腰のラインが、逆光に淡く透けて見える。それは衣服というものが、裸身を覆うためにあることを思い起こさせる。

開いた窓から入り込む風に、白金色の髪が気まぐれにそよいでいる。驚きがないことに、恵那は驚いている。

たぶん、自分でも気づかないうちに、こうなることを予期していたんだと思う。

部屋のいちばん奥に、小振りな鍵盤楽器らしきものがあつた。

長方形の本体を長い脚が支える形は、現在の電子ピアノに近い。

蓋は開かれ、鍵盤が見える。黒鍵と白鍵が普通の配色とは逆になっている。

クラヴィコード。

それが現在のピアノ以前の時代に用いられ、既に音楽史の主流から去って久しい楽器であることを、恵那は知らない。その簡素な発音機構ゆえに、扉の外まで音が届くはずのないことも。

「あなたが弾いていたの？」

「いいえ。だれかが弾いていたわけではないわ」

ふたたび、謎かけのような答え。

問いたいことはたくさんあつた。

自分が彼女のことをなにひとつ——名前さえ、知らないことに気づいた。

「あなたは……だれ？」

「人に名を尋ねる時は、まずは自分から名乗る方がよくはなくて？」

「そっか……そうだよね」

素直に納得する。

姿勢を正し、少し照れながら、恵那は言った。

「白河恵那、です」

少女がくすつと笑つた。

細い両脚を振り子のようにして、ひょいっと椅子から立ちあがる。

「恵那、ようこそ菩提樹荘へ」

まただ、と思つた。

外国の言葉なのに、なぜだか意味が汲み取れる。

「……ボダイジュの、館？」

聞き返すと、無垢で無邪気な笑顔をよこす。

「わたしはフレイヤ」

少女は爪先立ちになり、恵那の耳に唇を寄せた。

「なにをして、遊ぶ？」

「さあ、これはどうかしら？」

「あつ、そこは……」

「ただ受けるばかりではなく、あなたの方からも攻めてみてはいかが？ でないと、ふたりで遊ぶ甲斐がないわ」

フレイヤと恵那は、屋敷の中庭にいる。

建物の両翼がコの字に回り込む内側に、隠されているスペースだ。

隙なく刈り揃えられた芝の中央で、時折、二匹の魚をかたどった噴水がしぶきをあげる。

硝子を削りだした瀟洒なチェステーブルを挟み、二人は対峙している。

フレイヤは黒檀の駒。

恵那は象牙の駒。

表面がきめ細かく、指に吸い付くようなスタントン型のそれは、素人でも最高級品だとわかる。

しかし、いくら用具が最高級でも……

「よし、チェック！」

「ヴァルテメール
待った」

「つてまたあ!? 何回待ったかけたら気が済むのよー」

「あなたがそんなはしたない進め方をするから、定跡が辿れなくて調子が狂っているのよ」

「予想がついたら勝てないじゃないのよっ」

「あら。そんなに勝ち負けにこだわるなんて、無粋なことね」

「しかたないなあ……じゃあこっちは戻して、こうしてあげるから」

「あなたのお城はいつから女王になったのかしら？」

「あ、ごめん。ルークね、ルークだから、えーと……前後左右か」

駒の動かし方すらおぼつかない恵那。キャスリングもアンパッサンも、無論お呼びではない。そして、恵那の手が気に食わなければ、当然の顔で待ったをかけるフレイヤ。

かくして盤面は激しい乱戦となり、優雅さからは程遠い。

膠着状態を打開すべく、フレイヤが沈思黙考に入る。

恵那は別のことを考えている。

この勝負は、なにかがおかしい。

まだ小学生の頃、父親がたわむれに教えてくれたチェスと、どこかが決定的に違う気がする。

対戦相手はなにも言わない。

絶対、知ってて黙っている顔つきだ。

チェステールから少し離れたところに、メイドが直立不動でかしこまっている。

主人と客との密談を盗み聞くことなく、用事を申しつけられればすぐに対応できる絶妙の位置取りなのだが、恵那にとってはどうも落ち着かない。

「あの、ヒルダさん」

「どうぞ、ヒルダとだけお呼びください」

それだけは譲れないと言わんばかりに答える。

「ええと、じゃあヒルダ。あの、端まで行ったらポーンが強い駒になるみたいなルールって、ありませんでしたっけ？」

「ございます」

「やっぱり！」

「恵那様、失礼ですがご存じでなかったのですか？」

「さっきこの子に訊いたんだけど、ポーンは端まで行ったらそれっきりって言うんだもん」
「目前の少女を睨みつけるが、涼しい顔だ。」

「不正はいけません、お嬢様」

「失礼ね。謀報戦の一環よ」

「ともあれ、十六世紀以降の定律に則りますなら、歩兵は敵陣の端まで達しましたら、王と歩兵以外の好きな駒に成ることができまし、また成らなければなりません」

「だと、たとえばこの駒ってこうすると、クイーンにできるよね？」

右端のポーンを上に乗かす。

フレイヤは無言のまま、盤外に囚われていた白の女王を差し出した。

黒方にはもう、動けるポーンは残っていない。

「じゃあ、これとクイーンを取り替えて……うわっ、めちゃくちゃ有利になったかも」
「むしろ今までが不当に不利だったのだから。」

「お楽しみただけているようで、何よりでございます」

主人の不満げな視線を飄々と受け流しつつ、ヒルダは客に微笑みかける。

「屋敷内には遊戯室も盤戯室もあるのですが、どちらもまだ整理中でしたので……」
「さかんに恐縮しているが、そんな本格的な用意をもらっては逆に困る。」

「いえ、こうやって外で遊ぶのって楽しいですし、ね？」

「ええ。どこで遊んでも楽しいわ、自分に有利な局面であれば」

「苦しまぎれの手を強いられながら、フレイヤは言った。」

「ところであの、まだ引越してきたばかりなんですか？」

「はい、昨晚こちらに」

「……」

さすがにそれは冗談にしても、ちょっと豪快すぎて笑いどころがない。たぶん『昨日』かなにかと間違っているのだろう。

「ヒルダ、余計なこととは言わないで。真剣勝負の最中なのだから」

「失礼しました。それでは、私はお茶の支度をして参ります。何かありましたらお呼びつけくださいませ」

すらりと背筋を伸ばしたまま、屋敷の方に歩いていった。

「真剣勝負ねえ……」

恵那はつぶやきながら、成ったばかりのクイーンを斜め後ろに進めた。

「ヴァルテ待った」

「もう待たない。ゼーったい待たない」

「そんなに勝ち負けにこだわるなんて……」

「無粋でもなんでもいい。勝ちたいもん、わたしだって」

「では、縛り手ね」

起死回生の一手を受けて、フレイヤはまた考え込む。

癖なのだろう。夢中になると細い両脚をぱたぱたさせるのが、抱き寄せて頼ずりしたくなるほど可愛い。

まるで、小さな子供と遊んでいるみたいだ、と思う。

……つて、ほんとにまだ子供なだけ。

「ねえ、あなたって歳いくつなの？」

「いくつに見えて？」

「えっと……九歳か、十歳ぐらい？」

「なら、十でいいわ」

「そうなんだ」

「王手」

「えっ!？」

そんなはずはと盤面を確認する。

「ちょっと、今動かしちゃったよ！ 左手でわたしのキング動かした！」

「おかしい言いがかりはやめてくだらない？」

「支度が調いました」

ヒルダの声が聞こえた。

座ったまま振り向き、恵那はまたも目を丸くした。

なにもなかったはずの芝生に、マホガニーの丸テーブルが据えられていた。

天板の上には、鱗模様^{エカイユ}をあしらった白磁のティーセット一式が、まるで電子機器の回路図のよう
に整然と配されている。

中央に幾皿かのホールケーキと、焔^{ウオーマ}炉に乗せられた大きな銀製のコーヒーポット。

そして曲^{トナ}木のカフェチェアがふたつ。

用意の間、皿が触れ合う音さえ気づかせない、まるで魔法のようだった。

「一時休戦ね」

フレイヤが宣言し、そそくさと席を立つ。

「というか、もう終戦にした方がいいと思うんだけど……」

げんなりと恵那も応じ、その後が続く。

優雅な西洋将棋^{チェス}の午後はいつしかルール無用の泥仕合に転じ、あわれ討ち死にした家臣^{チエスメン}たちが
屍の山を築いている。

ふと、視線を上げる。

高い屋根の向こう、もう夕方のはずなのに、空はまだ涼しげな青さを保っている。

今、何時なんだろう？

携帯電話で確認しようとして、さすがに失礼だと思い直した。

きつとこの庭では、時間が外よりゆっくりと流れているのだろう。

銘々のカップに、濃い色をしたコーヒーが注がれた。煎りたて挽きたての豆ならではの華やかな
香りが、カップを持ち上げなくても漂ってくる。

「コーヒー、大丈夫？」

自分が十歳——まだ小学生の頃は、刺激が強いからと飲ませてもらえなかった。

「どこかのメイドが毒殺を図っていなければ、大丈夫よ」

さっきのことをまだ根に持っているらしい。

「マンデリンの最高^{ゴルデン}等級でございます」

どこ吹く風でヒルダは答えた。

ついで、菓子が切り分けられる。

なんの飾りつけもない、焦茶色のチョコレートケーキ。

皿の片側にたっぷりの生クリームが添えられている。

ひとしきり給仕をすると、ヒルダはまたテーブルの傍で待つ。

「あの、一緒に食べないんですか？」

「私は後ほどいただきますので」

召使いとしては正しい態度なのだろうけど、こういうのにはなかなか慣れられそうにない。

「さあ、召し上がれ」

小さな女主人^{ホステス}がにっこりと笑みを浮かべ、たったひとりの客をうながした。

恵那はカップを引き寄せ……いつものように砂糖を入れようとするが、スティックシュガーはもちろん、砂糖壺らしきものもどこにも見当たらない。

「あの、砂糖がミルクって……」

「無粋なことね」

待ってましたとばかりに言われる。

仕方がないので、まずケーキから食べることにした。
ぱく。

不味くはない……けれど、正直言って野暮^{マダマダ}たい味だ。スポンジがばさばさしていて、チョコレートは砂糖のかたまりを食べているみたいにならざらと甘い。喉を通すのが一苦労だった。

たまらず、添えものの生クリームを舐める。

こっちは砂糖を入れ忘れたのか、まったく甘みがない。

最後にコーヒーに口をつける。

目を回してしまふほどに濃く、苦かった。

……もしかして、わたし、意地悪されてる？

フレイヤのことをうかがう。

「ザッハトルテの作法をご存じないようね」

言うなり、銀製のフォークを持ち上げた。

優雅な手つきでケーキを少し切り分け、生クリームをたっぷりつける。

それから口に運んだ。

見様見真似で、恵那もそうしてみる。

……うわあ。

古風な砂糖菓子だったケーキの印象が一転した。

実直で上質なチョコレートの甘みと、ふわりとしたクリームの舌触りが渾然一体となり、まるで室内楽の合奏のように舌を蕩^{とろ}かしそうになる。

そして、とびきり濃く入ったブラックコーヒーをすする。

苦みが甘みを引き立てて、さらに複雑な印象を響かせる。

やがて、味の余韻が洗い流されると、舌がさらに研ぎ澄まされた気さえする。
あれだけ甘ったるかかったケーキが、これならいくらかでも食べられそうだった。

「いかがかしら？」

自分のカップを置き、フレイヤは得意げに問う。

ちよっと悔しいけれど、これでは降参するしかない。

「こっやって食べると、信じられないくらい美味しい……」

「菓子と乳脂^{トルテ}と珈琲^{ザーネ}、別々に口にしては、ザッハトルテの本質は味わえない。三位^{トリニテ}一体を知らし

めるのに、神^{テオロギ}学を持ち出す必要はないわ。そうではなくて？」
フレイヤが言う。

その微笑みに、恵那は惹き込まれてしまう。

外見相応の子供っぽさと、ひどく達観した警句の妙が、同時に笑っている不思議な少女。一切れ目が終わると、さりげなくヒルダが言った。

「恵那様、おかわりはいかがでしょう？」

「はい、ぜひ」

「珈琲^{カフェ}も注いであげてね。うんと熱くなくてはいけないから」

「……あ。それとこっちつて、微妙に違うんだ」

「はい。こちらがホテル・ザッハー、こちらがデメルのもです」

「甲乙つけがたい仕事だけれど、ごこではデメルの方が口に合うわ」

「御意にございます」

ささやかな茶会は続く。

甘いチョコレート菓子和香り高いコーヒー、美しい少女と礼儀正しいメイドの語らい。夢の中にいるみたいだ。

もう何度目かも忘れてしまったけれど。

心から、そう思った。

携帯電話の呼び出し音で、恵那は夢から現実に引き戻された。

自分の部屋だった。

カーテンの隙間から光が差し込み、窓辺の机からベッドまで斜めに白線を描いている。
携帯^{ペンク}を手繰り寄せ、ぶんつと一振りで開く。

「……もしもし？」

『起きてる？』

聞き慣れた声は、三朝木奏だった。

「寝てるよー」

『つてことは暇よね？ クロスリーに十一時、お昼おごるから』
一方的に言って、通話が切れた。

「まあ、いつものことだけど……」

寝ぼけまなこのまま、液晶画面で時間を確かめる。

SUN 10:13——日曜、十時十三分。

「……うあ。無茶言うし」

恵那はそのそとベッドから這い出し、着替えをはじめた。

カフェレストラン、クロスリー・フィールド。

この清潔で明るい照明の店は、JR宮薙駅前北口広場に面した絶好の立地だが、値段が高めなせいか混み合っているのを見たことがない。

振袖町の商店街に入ればスターバックスやタリーズもあるが、奏曰く、『コーヒー配給所の窓口に並ぶ趣味はない』そうで、待ち合わせはいつもこと決まっている。

ブラックデニムの膝丈スカート、ロンTに半袖パーカ、気にするほどじゃないけれど一応身なりを確認してから、恵那は店内に入った。

南側テラスのひさしの角——いつもの席でいつものように、奏は新聞を読んでいた。

空になったコーヒークップの脇に、パールホワイトのプレミニSが無造作に置かれている。

ここなら音声通話でも迷惑にならず、気づかれることなく通行人を観察できる上、駅ビル外壁に据えられている大スクリーンがニュースを流しているのも見える。

「来たよー」

「おはよ」

恵那が向かいの椅子に座ると、奏は新聞を畳んだ。

それが全て英語の活字で埋められているのに気づき、恵那は呆れ顔で言う。

「よく読めるね、そんなの」

「適当に流し読みしてるだけ」

そっちの方がすごい気がする。

アースカラーのシンプルなブラウススーツに、目立った化粧はごく淡いリップメイクだけ。なのに相変わらずの存在感だ。少なくとも、恵那と同じ高校生には見えない。

「どうする？ ランチ始まったから、先になにかおごってもいいよ」

いつもの調子で恵那に訊いてくる。

「奏は？」

「あたしはそろそろお腹すいてきたところ」

「じゃあ食べようかな。わたしも朝抜いてきたし」

「美容に悪いって」

「十一時って言ったの、そっちなんですけど？」

「別に遅れてきてもよかったのに」

言いながら、テーブルの脇にあるメニューを恵那に向けて開いて差し出す。

「高いのでもいいからね、存分にどうぞ」

「じゃあ、決めた」

すかさず答える。

ウェイトレスが来て、恵那の分の氷水をテーブルに置いた。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「BLTアンドツナエッグとキリマンジャロAA」

奏の手慣れたオーダーが続いて、恵那もメニューを指さしながら言う。

「鍋焼き和牛ハンバーグって、あります？」

一日十食の限定メニューで、美味しいと聞いてはいるけれど、恵那はまだ食べたことがない。

「はい、ございます」

「じゃあ、鍋焼き和牛ハンバーグとライスとチリサラダ。あと、えーと……スペシャルブレンド」

「調理に少々お時間がかかりますので、コーヒーは食前にお持ちしましょうか？」

「あっはい、お願いします」

「かしこまりました」

流行りのメイド風コスチュームにつけられたリボンをせわしく揺らし、ウェイトレスは早速で調理場に戻っていった。

やっぱり、本物に比べちゃうと身のこなしがなあと、半可通なことを思ってしまう。

「『どーにかまきあーと』じゃなくていいの？」

『今月のおすすめコーヒー アイスハニーバナラマキアート』という派手なポップをつまみあげながら、奏が面白そうに訊いてきた。

「いいでしょ？ なに頼んだって。そっちこそ、『ぶるーまうんでん・なんばーわん』じゃなくていいの？」

「今日はもう二杯飲んだから」

「……いつからいるのよ？」

「開店から」

「住めばいいのに、ここに」

「全体的に豆がもう少し深煎りなら、考えてもいいけど」

「それで、今日はなんの呼び出しなわけ？」

「まあ、わかつてると思うけど……」

テーブルに両肘を突き、恵那のことをじーつと見る。

「金髪美少女もいいけどね、もっと身近なところにも目を向けた方がいいと思うよってこと」

「……なにが言いたいのよ」

「昨日の夜ね、あたしのところに電話があったの。水縞さんから」

「水縞さんって、凜々子ちゃん？　なんで!？」

「昨日の帰り、うやむやになった誘いの一件を思い出しながら訊ねる。」

「『最近白河せんばいに変わったことないですか?』だって。まあ、それを言い出すまで二時間ぐらい雑談に付き合わされたけど」

「うわあ……」

「……もう知られちゃったか。」

水縞凜々子は——一口で言うなら、恵那の妹的な存在だ。

彼女が一年生部員の時、個人指導役は恵那だった。

その関係で、部活はもちろん勉強や私事にまで、相談に乗ることが多い。

だから、彼女は恵那のことを……ちよつと困ってしまっぐらい、よく慕ってくれている。

新学期早々、恵那が色恋を巡る騒動に巻き込まれた時も、終始恵那の側に立って擁護し、大立ち回りを演じてくれた。

そのおかげでさらに話がこじれまくり、大島部長、佐竹副部長をはじめとする弓道部員一同に多大な迷惑をかけたのも事実だったけれど。

「直接訊いてくれれば、隠したりしないのに……」

「わかってないわねえ、乙女心が」

「でも、奏さんって完璧すぎて近づきにくい感じですよって、いつも言ってるんだよ？　凜々子ちゃん」

「完璧うんぬんは褒め言葉と取っとくとして、どうも他の二年生から水縞さん、そこから佐竹さん経由で手鞠に話を持ってって、あたしの電話番号聞き出したみたいだけだね。とりあえず、噂なんてあんまり気にしない方がいいって答えておいたけど」

「……その噂を流した張本人に言われると、なんかすっごく腹が立つんですけど」

「まあそれも一種の愛情表現として」

殺意の籠もった視線をかるく受け流す。

「あこがれの白河先輩を、いきなり降って湧いた外人少女なんか盗られてたまるもんですかってことで、関係者一同色めき立ってるみたいよ。健気な水縞さんはその急先鋒ってことで」

裏表のない明朗快活な性格と、親しみやすい容姿のためか、恵那は人に好かれるタイプだ。大病院の院長令嬢という対外的身分に無頓着なのも大きいのだろう。

そして、本人にまったく自覚はないが、恵那はなぜか、特に年下の同性に人気がある。

実際、恵那にあこがれている学校の後輩は多いし、中には単なる友人以上のものを夢想する者もいる——その手のことにはあまりに鈍感な親友に、奏はそう言って聞かせる。

「一応共学校って言っても、芙蓉館の場合今までの伝統があるからね。そういうニュアンスには

敏感でいないと、また面倒事に巻き込まれるわよ？」

「そんなこと言われても……」

恵那本人にはその手の倒錯した感情はまったくない。ないはずだ。ないと思う。たぶん……

「お待たせしました。キリマンジャロA Aの方は……」

「コーヒーが届き、しばし話が中断する。」

奏は当然のようにブラックのまま口をつける。

恵那もそれに倣い……

「にが……」

「当たり前でしょ？」

呆れられる。

「ところで、昨日の密会はどうだったの？」

「密会って？」

「首筋にキスマークついてるよ？」

「ついてないもん、そんなの」

「なんでわかるの？」

「だって、チェスしてお茶ただけだし」

「ふん」

気づいた時には、既に遅し。

「チェスしてお茶ねえ。優雅なことで」

勝利のコーヒーを味わう名警部と、テーブルに突っ伏す容疑者。

「あーもうくやしっ！ 警戒してたのに、どうしてこつなっちゃうんだろ……」

「一、無理な時間を指定したのにぴったりに来る。二、昨日の今日なのに妙に生き生きしている。

三、似合わないブレンドコーヒーを頼む。四、それをブラックで飲んでたちまち後悔する……」

敗因を淡々と分析しながら、恵那のカップに勝手に砂糖を二匙入れ、かき混ぜる。

「で？ その子は結局なんだったわけ？」

仕方なく、恵那は昨日の一幕を打ち明けることになるが、それがまた奏を呆れさせる。

「……その子が自称十歳で、最近近所に越してきて、それがメイドつきの大豪邸だったことはわかったけど、肝心の正体が全然わからないんだけど」

至極もつともな感想を言われ、恵那もはたと考え込む。

「そう言えば……」

「そう言えば？」

「やっぱりドイツ語話してたよ」

嬉しそうに答える恵那。

「……よくわかったわね」

溜息をつきつつ、かろうじて応じる奏。

「うん。話していると英語じゃない外国語が混じってたし」

「英語じゃなかったらドイツ語決定なわけね……そんなんでよく意思の疎通できたわねえ」

「話の流れでなんとなくわかったから」

「ふーん……恵那ってけっこう外語会話得意だったんだ」

「うん。自分でもちよつと驚いてたり」

二人分の料理を携えて、ウエイトレスがこちらに向かってくるのが見えた。

「まっ、あとは食事でもしながらたっぷりうかがうとしましょうか」

「なんか食欲なくなってきた」

「じゃあ、噂の鍋焼き和牛ハンバーグはあたしが……」

「それは食べる」

午後一時半、まだまだ日は高い。

晴れあがった初夏の歩行者天国を、奏とふたりで歩く。

「これからどうする？ 黒金通りの方行って映画でも見る？」

奏の提案に、恵那は訊き返す。

「なんか面白そうなのやってるの？ 全然チェックしてないけど」

「あたしの趣味でよければ、ないこともないけどね」

「なに？」

「洋館もののホラー。すつつつごく恐いらしいよ」

「……ずえつつたい、イヤ」

すれ違う男性が、時々こちらを振り返っていく。

『生まれながらに注目を浴びる存在』というジャンルがあるなら、三朝木奏はその筆頭近くに挙げられるだろう、と恵那は思っている。

なんというか、そもそも組み立てに使われている部品が自分とは違う感じがする。指さす時に目に入る真珠みたいな爪の艶とか、手入れの要らなそうな細眉と切れ長な目尻とか、髪をかきあげた時に覗くうなじの後れ毛とか、ちよつとしたことにさえ、つい見とれてしまう。

喫茶店での新聞は周囲の視線から美貌を隠すためだとよく言っているが、あながち冗談でもな

いのだと思う。

それでいて、美人を鼻にかけるようなところはまったくない。

何事に対しても悠然とかまえ、それでいてノリもよく、知識が豊富で会話も巧み。学校の教師にさえ一目置かれている。

ただ、同性異性を問わず、一定の距離より内側に他人を入らせないところがあるなとも思う。そんな彼女が、なんで自分を気に入ってくれているのか、恵那にはわからない。

わからないけれど、少しだけ誇らしい。

「さてと、なーんか面白いことないかな」

両手を組み合わせて大きく伸びをし、奏が言う。

「そうそうないって、面白いことなんて」

恵那は答えたが、そう決めつけるのは早計だった。

歩行者天国を抜けて中央公園通りに出た時、通行人たちの間にどよめきがあがった。

ふたりは振り返る。

この辺りではめずらしい黒塗りのストレッチリムジンが、違法駐車のにボディーを擦りそうになりながらこちらに曲がってくるどころだった。

「なんかすつこいのが走ってくるよ？」

「運転からして政府要人用ってわけでもなさそうだけど……」

それはなぜか、恵那たちの脇で車^{ノーズ}鼻を沈ませ、急停車した。

「恵那様、お待ちくださいませ」

「……えっ!？」

運転席から降り立ったのは、ヒルデガルト・フォン・ファーバーだった。

モスグリーンの外出着に長身を包んだその姿は、ただでさえ細いウエストがきゅっと絞られ、それでいて胸元の起伏は上品に薄く、流行りのファッションモデル体型そのままだ。

当然、周囲の景観から激しく浮きまくっている。

「マイバッハ62のそのまたストレッチなんてはじめて見たわ、ってこれ……」

超豪華なドイツ製特注リムジンを興味深そうに眺めていた奏が、めずらしく素っ頓狂な声をあげた。

恵那もそちらに回ってみる。

バンパーの後部がひどくひしゃげ、テールランプが割れていた。

「うわあ……どうしたんですか？ これ」

「はい、郷に入れば郷に従えと申しますので、当代最高の車をと手配したのですが、屋敷の表門を出た先の曲がり角に、緩衝器^{ブッファ}がこう、がつんっ！ とひっかかりまして……」

「……………」

無言のまま、あの路地を思い返してみる。

どう考えても、物理的に走行不可能だ。

「というか、そもそもどうやって屋敷の敷地に入れたのかわからない。」

「その後どうにか大通り^{シュトラッセ}に出たはいいものの、こちらの土地では車は左側通行ということをしつかり失念しておりまして」

顔色ひとつ変えることなく、ものすごいことを説明するヒルダ。

「……でもあの、こういう車って普通、運転手さんがつくものだと思っただけです」

「お嬢様をお運びする大切な役目、どこの馬の骨ともわからぬ運転手^{ジョフエア}などに任せてはおけません」
「って、あの子乗ってるの!？」

「もちろんでございます。お嬢様専用の車ですので」

ヒルダが後席のドアを開くと……

「……酷い^{ひど}目に遭ったわ」

ファーストクラスもかくやの革張り座席に埋もれ、金髪黒衣の美少女がぐったりしていた。

ヒルダの手を借り、ずとんと歩道に降り立つ。

なりゆきをうかがっていた通行人たちの間から、またもどよめきがあがった。

にぎわう白昼の街中、巨大なストレッチリムジンから、スーパーモデルと見まごうばかりの長身美人と、アンティークドールのごとき金髪美少女が降りてきたとあれば、騒ぎにもなるうというものだ。

「見て見てあれ、あの子、すっごいかわいい」

「有名人？ 有名人？」

「あれってなんかの撮影だよ？ 知ってる？」

歩道にたちまち人だかりができた。

注目の主二人はといえば、周囲の騒ぎをまったく意にも介していない。

「髪が乱れてしまったわ。鏡をお願い」

「承知しました」

運転主兼侍女に携帯三面鏡を用意させると、青薔薇^{ブルーローズ}のコサージュをあしらったハードフェルト

帽を慎重に被り直し、くいくいと角度を整える。

「それから、ヒルダ」

「はい、お嬢様」

「この戦列艦^{マインシュロー}はあなたが責任を持って軍港^{ガッマス}まで返しておいて。もう懲り懲りだわ」

逆車線走行によほど辟易^{へきえき}したのだらう、わざとらしく英語を交えて言う。

「面目ございません」

「ここからは、恵那に案内してもらおうから」

「……へっ？ あの、わたしっ!？」

突然お鉢を回され、自分で自分を指さして訊く。

「ここにはあなたの他にもあなたがいらっしやるのかしら？」

助けを求めるように、恵那は奏の方をうかがう。

めったなことでは動じない奏も、この少女には驚きと刮目かつもくを隠さない。

「聞きしに勝るわねえ……。恵那、紹介して」

「紹介って言われても、わたしだって会ったばかりだし……」

「いいから」

せつつかれ、奏をフレイヤの前まで引き出した。

「あの、こちらは三朝木奏みさぎかなで、わたしの学校のクラスメートです」

「よろしくお見知りおきを」

エレガントな笑みを、如才じょさいない所作で包んで渡す奏。

「で、えーと、こちらはフレイヤさん。わたしの……」

……わたしの、なんなんだろう？

はたと考え込む恵那を尻目に、フレイヤは奏の目前できちんと姿勢を正す。

恵那と対峙する時以上の身長差だが、年上年下という感じは不思議とない。

「お目にかかれて嬉しいわ、奏さん」

「こちらこそ。恵那から少しだけお噂は聞いていました。こんなところでお会いできるとは思っていませんでしたけれど」

「まあ、どんな噂かしら。恥ずかしいわ……」

上流階級の会員制サロンのような会話を、宮薙駅前繁華街の路上で平然と交わすふたり。

わけもわからぬまま、カメラ付き携帯で写真を撮っている見物人までいる。

「わたしはこれで失礼します。これから私用がありますので」

「それは残念だわ。機会があれば、ぜひお茶を一緒に」

「楽しみにしていますわ」

「って奏、帰っちゃうの!？」

気を利かせてくれるつもりなんだろうけど、一緒にいてくれた方がよっぽど助かる。むしろ、いてくれないと困る。

すがるような恵那の視線を受け、奏はそっと耳打ちした。

「どうなったかあとで聞かせて。それじゃ、頑張ってもものにしてね」

「なにをものにするのよ？ なにをつ」

「それではご機嫌よう、フレイヤ姫」

スカートの裾をつまみあげ、腰を少しだけ落として挨拶。

「ご機嫌よう、お美しいひと」

フレイヤも同じ仕草で応じる。

恵那が引き留める間も与えず、奏は悠々と駅の方に歩いていった。

「……どうしよう？」

「恵那様、申し訳ありませんが、こちらをお持ちください」

いつの間に用意したのか、ヒルダが銀製の丸盆を差し出してきた。

朱色のシーリングワックスで封がされた、洋形の封筒が乗せられている。
封印^{シール}には流麗な飾り文字でFと刻されている。

「これ……なんですか？」

手にとつて、透かしてみる。

なにか薄くて固いものが入っているらしいが、よくわからない。

「では恵那様、よろしくお願いいたします」

「あつ、待つて……」

ノーマル5.5リッターV型12気筒ツインターボにさらに手を加えたであろう、壮麗かつ重厚な排気音を轟かせ、マイバッハ・ズーパーリムズイーネは走り去った。

残されたのは、浮き世離れ代表の金髪美少女と、浮き世代表の白河恵那。

「で、どこに行きたいの？」

覚悟を決め、恵那は訊ねた。

「時計を修理に出そうと思うのだけれど、腕の確かな職人をご存じないかしら？」

「職人って言われても……わたし、そういうの詳しくないし」

「あなたは時計をお持ちではないの？」

「携帯電話^{ケータイ}があれば時間はわかるから」

「随分と無粋なことね」

言われると思つたけれど、やっぱり言われた。

「愛でる時計のひとつもなしに、時間の価値など語れないわ。そうではなくて？」

当然の顔で恵那に問いかけ、にっこりと笑う。

これから始まる苦難の時がなんとなく想像されて、恵那は溜息をついた。

買い物客で鈴なりのエスカレーターも、上階に登るにつれてようやく空いてきた。

「まったく、雲霞^{うんか}のごとき群衆とはこのことね……」

独裁者のようにフレイヤがつぶやく。

だが、言うほど尊大な風でもない。

恵那の前の段に大人しく立ち、次々に現れる売場の様子を興味津々に見ている。

花菱百貨店宮雑店は、白河家が昔から^{ひいき}贖^{ひいき}にしているデパートだ。売場の規模は県下有数だし、雰囲気^{きふき}が過剰に若向けでないところが、お洒落に疎い恵那にはちょうどいい。

それに、父親が外商で世話になっているから、いざとなれば多少の口も利く。

恵那としては、そういうコネはできるだけ使いたくないところだけれど。

「この階だから」

八階、宝飾時計売場に降り立つ。

「自動階段は本当にひさしぶりだったわ。随分滑らかに動くのね」

「逆に歩かないの。怪我しても知らないよ？」

階下から上がってきた身なりのいい中年夫妻が、ステップとたわむれる金髪少女に目を見張った。

「ほら、こつち」

あわててエスカレーター前から引き剥がす。

「そんなに急かさなくてくださるかしら。売場は逃げなくてよ」

骨董売場の前を通りかかると、見覚えある灰髪の店員がめざとく声をかけてきた。

「白河先生のお嬢さん？ いやいや、お綺麗になられましたねえ……」

「あつ江崎さん、おひさしぶりです」

「今日はご家族でお買い物ですか？」

「いえ、今日はわたしだけ……じゃなくて、連れがいるにはいるんですけど」

フレイヤを引き会わせようと見回せば、もう高級時計のショーケースに取りついていた。

「お友だちとお買い物ですか。ほうほう、それはそれは」

「えーと、それでちょっと、相談したいことがあって」

「私でよろしければなんなりとお話してください」

恵那はこのベテラン店員——今は宝飾階主任だが——の接客が気に入っている。

どんな時でも柔和な^{にやわ}笑みを絶やさず、まだ恵那が小さな女の子だった頃でさえ、他の客と対等に扱ってくれた。

多忙な父の唯一の趣味である骨董蒐集も、この人がいればこそ続いているのだと思う。

江崎翁に事情を話している間、フレイヤは蜂鳥のようにケースからケースへ飛び回っていた。

「腕時計ばかりなのね。自分の時を手首でひけらかすのはあまり粋^{いき}とは言えないわ」

勝手な感想を言っている。

見かけは小さな外人少女、言葉遣いと態度の大きさは創業以来の常連客のよう。

どう対応したものか、店員たちが困惑しているのがわかる。

「あら。これはなかなか品のいい時計ね」

「はい、こちらエルメスのケーブコッド・ドウゾーン・ドゥーブルトゥールでございます」
年若い女性店員が、果敢に接客を試みる。

「あなたの言うエルメスは、バス・デュ・ランパール通りの下請職人のことかしら？」

「はあ……ええ、たしかそうかと思ったんですが……」

「ここでは馬具職人に時計までこしらえさせているのね。世も末だわ」

「冷やかしてないで、あなたの時計を持ってきて」

恵那が呼びかけると、優雅な仕草で踵を返し、こちらにとことこ歩いてくる。

「これはこれは、ようこそいらつしやいました」

小さな貴婦人を目の当たりにし、江崎翁は親愛を籠めた最敬礼で迎えた。

「こんにちは。お世話になるわ」

「こちらこそ、今後ともどうぞご鼻屑に願います。さて、お使いの時計の調子がよろしくないとのことですが……」

「これよ」

例の懐中時計を取り出し、鎖を外した。

恵那が受け取り、時計売場のショッパマネージャーが出したラシャ貼りのトレイの上に置く。

「なるほど、これは珍しい……」

蓋を開け、文字盤を一目見るなり、マネージャー氏が息を飲むのがわかった。

「失礼ですが、これはどちらでご購入されたのですか？」

「もう忘れてしまったわ」

「左様ですか。いやしかし、これは……」

ただならぬ雰囲気、接客のない他の店員たちも集まってくる。

「この文字盤の艶、処理はなんだろう？ ブランド名がないし……再仕上げされてるのか？」

「それよりここ、このオーブダイヤル、一見トゥールヴィヨンに見えるんですが……違いますよね？ 微妙に動きがおかしい気もするし」

「レトログラードもわからん。こっちがパワーリザーブだとすると……」

「ユリス・ナルダンにこの手のシリーズがありましたよね？」

「いや、あれとは全然違う。このクラスのコンプリケーションを造れるブランドは当然限られるとしても……こんなモデル、存在自体聞いたこともないぞ」

「独立時計師のワンオフモデルという可能性は？」

「これだけのものを設計からフルオーダーで？ いつの時代の貴族だよ？」

客への対応すら忘れ、謎の時計に魅入られている。

門外漢の恵那でさえ、なにやら大事になっっているのはわかる。

時計の持ち主だけが平然としている。

会心のなぞなぞを出題し、友だちみんなが四苦八苦するのを見て楽しんでいる女の子、と言っ

たところだ。

「どんな案配かしら？」

フレイヤの一声で、店員一同が魔法を解かれたように我に返った。

「……失礼しました。それで不具合はどのような？」

シヨップマネージャーが居住まいを正し、訊ねる。

「とにかく壊れているの。おかげで待ち合わせを間違えてしまったわ」

「そうしますと、時間が狂うということですね」

「できるだけ早く直して頂戴」

「しばらくお待ちください……」

トレイごと時計を捧げ持つて売場の奥に行き、作業をしていた常駐時計師と相談する。

恵那はそつとフレイヤに耳打ちした。

「……ねえ、あなたの時計ってそんなにめずらしいの？」

「どの時計もみなめずらしいわ。ひとつの世界にひとつしかない、という意味では」

やがて、マネージャーが戻ってきた。

「申し訳ありませんが、しばらくお時間をいただけますか。中を見てみますので」

「ではその間、下のお店を見させてもらうわ。せっかくだから衣裳も買い揃えたいし」

恵那の方を意味ありげにうかがい、悠然と言った。

デパートが『百貨の帝国』だったのは、既に過去のことだ。

大型家具店や家電量販店の容赦ない侵攻により、その主戦場は衣料品にシフトしている。

ここ、花菱百貨店も例外ではない。

六階、子供服売場。

半年前の大幅店舗改装を経て、時代に取り残されていた売場構成を一新、ようやく息を吹き返した今、小さな淑女とその母親たちの愛顧を二分する人気の直営店舗がある。

片や創業三十有余年、この島国の少女たちにフェミニンな着こなしを根付かせた老舗中の老舗、『パールホワイト』。

片や新進気鋭、西洋服飾史を大胆かつ華麗に再構築、現代に蘇らせたゴシックロリータの雄、『バイブルブラック』。

その境界線上で、内戦は勃発した。

「いかがかしら？」

試着室のカーテンが開くと、フレイヤが現れた。

待ちわびていた店員たちから、そして騒ぎを聞きつけ集まってきた見物客たちから、感嘆と賞賛の声があがった。

清楚なフリルが開いた襟周りに奢られた、ごく淡いブルーのワンピース。

イメージコンセプトは、『あこがれの夏、フランス印象派の光』——パールホワイトこの夏——押し的主力商品だ。

さらさらと流れるプラチナブロードには、控えめな白のバックリボンを。

首筋にはフェイクパールのネックレスを、厭味にならない程度に、かるやかに。

ピエール・オーギュスト・ルノワール描くところの可憐でたおやかな少女が、キャンバスからそのまま抜け出し、目前で息をしている……そんな錯覚にさえ陥る。

「と~~~~っつっても、お似合いになりますわ」

店長の声の裏返り方も、既にセールストークの域ではない。

「やっぱり夏は涼しげな色づかい！ 気持ちもふわっと軽くなりますでしょ？」

「そうね。たまには気分を変えるのもいいものだわ」

フレイヤもまんざらでもない様子だ。

「恵那、ご感想は？」

爪先立ちでぐるりと回り、見守る恵那に問いかける。

「えーと、なんていうか……」

このフレイヤという少女が秘めた魔性の片鱗を、恵那は今、目の当たりにしている。
すなわち……

なにを着せても、恐ろしいほどに似合う。

今すぐ服ごと小脇に抱え、家に持って帰って棚に飾っておきたくなるほどに。

売場は既にフレイヤのソロファッションショー会場と化している。

客たちがこのありさまなのだから、服飾のプロにとっては鴨葱どころの騒ぎではない。

「まずいよー、なんでも似合うんだもん。どうしよう？ 次どれにする？ なに着てもらおう？」

「立ち姿完璧だし、着付けも全部ひとりでできちゃうし、本職だよね？ 本職のモデルさんだよ
ね？ わたしのシフトの時に来てくれちゃうなんて！」

「よかった……この仕事やっててほんとによかった……」

感極まって涙ぐむ者まで出る始末。

「ちょっとだけちがったデザインで、すっごくかわいいピンクのものもありますよ。せっくだからお試しになってみますかー？」

「そうね。せっかくだから……」

「いえいえいえいえ、お待ちを。ちょーつとお待ちを」

形勢不利と見て、バイブルブラック店長がしゃしゃり出る。

「夏だから明るい色という考えは、ちょーつと古いと思いませんか？」

スマイル全開、自信たっぷり言う。

「そうね、同感だわ」

「やっぱお客さまにお似合いなのは黒。黒だからといって夏場のお洒落をあきらめることはありません！ 実を申しますと、まだどのお客さまにもお見せしていない、とっておきがあるんです。お試しになりませんかあ？」

「それは興味深いお話ね」

「ではどうぞどうぞ。ささ、こちらへ」

モデルの気が変わらぬうちに、さっさと敵陣から強奪していく。

「あの……店長、あれは展示サンプルだけで明日工場バックだと思っただけですけど……」

「いいのよいいのよ、サイズもぴったりそうだし、試すだけ、試すだけだから」

「あっそうですね。試すだけならいいですよねっ」

販売のための試着という商行為の大前提さえ、とうに忘却の彼方にある。

試着室をハシゴさせる暇さえ惜しいので、脱いだ後の商品は店員が相手方に返却するという特別ルールまで確立している。

^{かたず}固唾を呑んで待つことしばし。

そしてカーテンが開け放たれる。

先ほどより低く、畏怖^{いふ}を含んだどよめきがあがった。

漆黒のサマードレス。

肌がほんのり透けるほどに薄いオーガンジーを基調にし、付属品は黒革とアルミニウム。

ウエスト脇はコルセットをイメージした編み上げとなっている。

文法はゴシックロリータそのものだが、世間一般に言うゴスロリ服から想起される仰々しさやわざとらしさはなく、無垢と無縫が完璧に調和している。

本来このドレスは、今夏のラインナップに主力投入されるはずだった。

だが、あまりにも高価すぎる仕様と着こなしの難しさのため量販^{スベックダウン}変更を余儀なくされた、言わば悲劇の逸品である。

「やっぱ黒！ よっくお似合いになりますねえええ」

「すごい……似合いすぎてオートクチュールにしか見えない……」

「もうだめ、鼻血出そう……」

恍惚の表情を浮かべながら、店員たちが褒めそやす。

「生地がとても軽くて涼しいわ……素敵ね。着慣れている色だから、落ち着くし」

「こうなると当然、お足元もコーディネートしなければなりませんよねえ……」

靴だ帽子だシルバーアクセだポシェットだと、勝手に出張してきた他の売場も巻き込みつつ、盛大な宴は続く。

「あはははは……」

虚ろに笑うしかない恵那。

フレイヤにはじめて出会い、口づけされてしまったその日の晩。

恵那は悶々と思ったものだ。

もしかして彼女は、自分にしか姿が見えない夕暮れ時の妖精のような存在ではないのか？

壮絶な思い違いだった。

「恵那、そろそろお茶の時間ではなくて？」

店員たちの勧めによりプレスレットを吟味していたフレイヤが、突然思い出したように言った。

「あつうんそうだね。どっかでお茶しよ」

天の助けとばかりに答え、そそくさとブースから外に出る。

とにかく一刻も早くこの狂乱の地を逃れ、場末の喫茶店ばすえで静かな余生を送りたい。

だが、そうは問屋が卸さない。

「安田さんっ！」

「はい、店長っ」

「今すぐB1まで走ってケーキと飲み物買ってきて！」

「わかりましたっ」

「そっちがそう来るなら、こっちは和菓子よ！ 叶匠かのうしょうじゆあん寿庵つるやちやうせいでも鶴屋長生つるやちやうせいでも、いちばん高いやつを買ってきてちょうだい！」

「はい店長！」

「まあ、和菓子？ それはとても素敵だわ」

「……あなた、簡単に釣られすぎ」

「いやいや、楽しくお買い物いただいているようで」

振り返ると、江崎翁がにこにこ笑っていた。

多忙なフロアマネージャーが自ら階を超えて接客に来るなど、通常あることではない。

「あ、騒がしくてすみません……」

「ああいえいえ、お気になさらずに」

てっきり怒られるのかと思ったが、そういうわけではないようだった。

「私どもの店長が、ちょっとだけご挨拶をと申しております」

「店長さん、ですか？」

店長さんたちなら、今もあそこで生意気な外人子役モデルの奪い合いをしてるけどなと思ってから、はたと気づいた。

この場合の店長とは……すなわち、花菱百貨店宮雑店支配人のことだ！

品のいいスーツの胸元に、花菱のプレートを掲げた五十がらみの紳士が、恵那に微笑みかける。

「岩瀬と申します。本日はご来店ありがとうございます」

「あつ、はい、お世話になってます」

「白河先生はお元氣ですか？　うちの家内も二番目の子の時は、そちらの産婦人科の方で大変お世話になりました」

「そうですか。こちらこそありがとうございます」

医者の娘につきものの会話をこなしつつも、騒ぎの感染拡大をひしひしと感じる恵那。

一通りの社交辞令を終え、岩瀬店長が本題を切り出した。

「ところで、大変失礼とは存じますが、あちらのお嬢様は……」

「こつちが訊きたいです」

「はい？」

「あ、えーなんでもないです……ちよつとフレイヤ、こつちに来て」

「いえいえ、こちらから伺^{うかが}いますので」

三人で歩み寄ると、フレイヤはまだ取り込み中だった。

「では、これとこれ……こちらもいただくことにするわ」

両店合わせて十数着の洋服の中から、特に気に入ったもの——つまり全部を選び出し、姫君はご満悦の様子だ。

「ちよつと、それほんとに全部買うつもり？」

「持ち手もあるし、心配ないわ」

「つてそれわたしが全部持つわけ？　じゃなくて、あなたお金持つてるの？」

いざとなれば自分が立て替える覚悟はしていたが、既に一介の女子高生が支払える金額をはるかに超えている。

「封筒を開けてごらんなさい」

フレイヤは答えた。

「封筒？」

聞き返してから、そんなものをヒルダから預かっていたことを思い出した。

パールのポケットから封筒を取り出して、指で端をちぎる。

中には分厚い札束が……入っているわけもなく、透明なカードが一枚、ころんと出てきただけだった。

「……なにこれ？」

クレジットカードかと思ったが、そういうわけでもないらしい。

磁性体やIC部分はおるか、番号さえどこにも見当たらない、ただの透明な薄板。たわむれに傾けると、中央に古代ローマ軍兵士の線画が浮かびあがった。

そしてその左脇に、またもFの紋章……

「レガテ……」

江崎翁と岩瀬店長が、二人同時につぶやき、そして同時に口をつぐんだ。

老舗百貨店の幹部と云えど、実物を拝む機会は一生一度あるかないかのその銘板の名は、衆耳ある場ではみだりに口にしてはならない。

「それで、このカードをどうしろっていうわけ？」

皮肉っぽく訊ねようとして、恵那は異変に気づいた。

岩瀬店長が直立不動のまま、フレイヤのことを凝視している。

こんな緊張している人間を、恵那は見ることがない。

「ご挨拶が遅れ、大変失礼いたしました。本日は当店にお越し頂き、まことに光栄に存じます」

重々しく震える声で、彼はそう言った。

熱病のように浮ついていたフロアの雰囲気が一変した。

店員も客も、ただ呆気にとられている。

わずか十歳ほどの少女を前に、派遣及びパートを合わせ従業員四千名を擁する老舗百貨店の支配人が、深々と頭を垂れたのだから。

「とてもいいお店ね。気に入ったわ」

少女はごくごく上品に、そして当然の顔で応じた。

江崎翁は影のようにその場を辞している。

アメックス・レガテ——通称クリスタルカード、または単に銘板と呼称されるそれは、全世界

でもごく一握りの王族及び貴族が『お忍び』に携行するとされる。『名も無き賓客』を迎え入れている旨について、今すぐ全床責任者への通達と、本部及び警備部への確認が必要だ。

舞踏会に招かれた主賓のごとき鷹揚さで、フレイヤは岩瀬店長に相対している。

「ところで、荷運びを何人が貸していただけないかしら？ わたしの連れ合いはきつと力持ちだ

けれど、持ち手がひとりでは心許ないから」

「ってまだなにか買う気なの!？」

「お買い上げいただいたお品でしたら、お買い物の間私どもの方でお預かりしまして、後ほど専用便で配達さしあげることもできるかと存じますが」

「無料なことね。求めた品々の重みを楽しむのも、買い物の醍醐味のひとつだわ」

「重いのはあなたじゃないから、わたしだから！ できるんなら配達にしてっ」

「持ち手が働かないと言うなら仕方ないわね。では、そのようにして頂戴」

「かしこまりました」

「ところで恵那、お茶の話はどうなったのかしら？」

「……やっぱりそこは忘れてないわけね」

「よろしければ、当館四階にフォートナム・アンド・メイソンのティールームがございますが」

「如才ない岩瀬店長の進言を、フレイヤはしばし吟味する。」

「ロイヤルミルクティーにスコーンも悪くはないけれど、今日は和菓子の気分だわ」

「ねえ、なら、わたしもよく行く甘味屋さんがあるからそこにしよ？　ちょうどこの三階だし」

「会話に割って入る恵那。これ以上フレイヤに任せたら、なにがどうなるかわからない。」

「そうね。あなたのお薦めなら、そこで一服しましょう」

「承知しました。早速手配いたしますので」

「慇懃^{いんぎん}に頭を下げた岩瀬店長が、手近なフロアスタッフを呼んで何事かを言いつける。

「……食事中のお客さまには重々お詫びした上で、他の店に移ってもらうように……」

「ええっ!?　あつ、あの、待つてくださいっ」

「漏れ聞こえてきた業務連絡の内容に、恵那は突っ込んでしまう。

「ただか自分たち二人連れのために先客を追い出すなんてありえないし、そんな無茶な貸し切りでのほほんとお茶できるはずがない。絶対嫌だ、嫌すぎる。」

「しかしながら、保安上の問題もありますので」

「いえあの、保安とかそういう大げさなことじゃなくて……」

「難色を示すデパート側と、なぜこんなことになっているのか今もって飲み込めていない恵那。

不思議の国とか鏡の国とか、そういうおとぎ話なゾーンにいきなり迷い込んで、ヤマネやらフエレットやらの陪審員相手に抗弁しているかのような不条理さだ。

「澄まし顔なのは、小さなハートの女王だけだった。」

「そうね。わたしの連れ合いがいささか舞い上がっているようだから、保安上の配慮が必要かもしれないわね」

「だれが舞い上がってるのよっ!」

「しっ、いけないいわ。買物に浮かれるのはわかるけれど、お店の中では静かなさらないと」

「あなたにだけは言われたくないしっ!」

「ならこうしましょう。お茶の時間に人払いは無用だわ。今日はお忍びなのだし」

「承知しました」

「フレイヤの鶴の一声で、岩瀬店長もようやく納得したようだった。

「ここまで目立ちまくっておいて、お忍びもなにもないと思うけど……」

「ひとり毒づく恵那を尻目に、フレイヤはよほど和菓子待ち遠しいのか、エスカレーターの方にとことこ早足で歩き出す。

「それではご案内しますので……」

「店長直々のエスコートの申し出を、首を軽く振って断る。

「結構よ。お茶の後にまたお願いするわ。恵那、お早く」

「はいはい……えとあの、どうもお騒がせしました」

岩瀬店長に会釈してから、やや遅れて恵那も後に続く。

通路で見物していた客たちが、金髪少女の足並みに合わせて左右に別れていき、恵那を赤面させる。まるきりモーゼの十戒か、悪役レスラーの退場だ。

と、突然フレイヤが叫んだ。

「恵那、大変よ！」

「どうしたのっ!？」

ただならぬ様子に、あわてて駆け寄った恵那。

「ごらんない、あの昇降箱^{アウフツック}、壁の向こうが透けていてよ。今すぐ試してみなくてはいけないわ」

厳然^{げんぜん}と言い放ち、花菱宮雑店名物富士山に見える展望エレベーターに乗り込む。

「ご用の階数をお知らせください」

にこやかに問いかけたエレベーターガールに、フレイヤは優美な声音で応じた。

「とりあえず、三往復ばかりお願いするわ」

「お待たせしました」

目前に供されたそれを見るなり、フレイヤは銀の瞳を丸くした。

「恵那、これはなにかしら？」

大振りの鉢に、たっぷりと盛られた角切りの寒天。その上にぴかぴかの黒豆がこれでもかと山盛りにされ、さらにその上から黒蜜がかけられている。

ただそれだけの、ごくごくシンプル^{ひとしな}な一品。

「豆かん。食べたことない？」

竹を削ったスプーンを取りながら、恵那は答える。

いっぱしのお菓子好きなら知らぬ者のない『甘味そら梅』で頼むものといったら、恵那にはこれ以外考えられない。デパート内店舗とはいえ、その味は浅草本店に引けを取らないと評判だ。周りの席の女性客たちが、それとなくこちらを覗き見ているのがわかる。

その中に、なんだかもうあからさまに店側の特命警備担当な背広の男二人連れが紛れていたりはするが、そこは無視してあげるべきだろう。

「こちらがあなたのお薦めなのね……」

なにやら難しい顔をして、フレイヤは豆かんを睨みつけている。

「もしかして、こういうの苦手？」

「虚飾のない楚々とした見てくれね。とても誠実だわ」

よくわからないが、見た目の印象はそう悪くないらしい。

「では、いただくとするわ」

竹匙を優雅にあつかい、山と掬った寒天と黒豆を唇に運ぶ。

しばしの咀嚼の後、ワインテイスターの繊細さでそっと目を閉じ、味覚に集中する。

充分に待った後、恵那は問いかけた。

「どう？」

瞳を開き、しばらく無言のフレイヤ。

豆と蜜と寒天が織り成す明暗を見つめたまま、厳かに言った。

「これがあなたの三位一体というわけね」

そしてふたたび、竹匙を動かしはじめる。

賛辞はそれで充分だった。

そもそも豆かんというものは、お喋りの片手間につつく類の菓子ではない。黒蜜の甘みと豆の塩気、寒天の香りと食感にひたすら向き合うためだけの、初心者お断りの超硬派なスイーツだ。二人向かい合い、無言で味わう。

器の中は見る見る減っていく。

かたわらの緑茶には目もくれず、ただ黙々と豆かんを口に運んでいるフレイヤ。

恵那はさりげなく体を傾け、テーブルの下をそっと覗いてみた。

思った通り、両脚をばたばたさせている。

笑みがこぼれてしまう。

フレイヤは本当に夢中らしく、だんだん前かがみになっていき、髪で器を払いそうになった。

「あっ……」

恵那はとつさに左手を差し出して、美しいプラチナブンドを豆かんの汁まみれから救った。

つるつるで、さらさらなんだ……

指にからめた髪を、やさしく、きゅっとしごいてみる。

女の子ならだれでも一度は憧れる、金色の蚕が紡いだかのような髪房……

「食べにくいんだけど」

「あっ、ごめん」

あわてて髪を放した。

竹匙を宙に持ち上げたまま止めて、フレイヤは恵那の顔を正面から見つめる。

「わたしをお食べになりたいのなら、夜まで待ってくださいさるかしら。ここでは、恥ずかしいわ」
銀櫛のような睫毛を震わせ、淡い吐息にらせて囁く。

「そういうのじゃなくて、えとほらあの、髪、気をつけて」

恵那はどきまぎと取り繕うしかない。

どうもやつぱり、なんというか……油断ならない子だなあと思いながら。

やがて、きれいに空になった菓子鉢がふたつ。

程よく温ぬるくなった緑茶で、二人はくつろぐ。

「美味しかったでしょ？」

「なかなかいい仕事だったわ」

評論家のように素っ気なく答えるフレイヤ。

小さな手のひらをきちんと湯飲みの高台に添えて、ずっと緑茶を啜すすっている。

「勿体つけてないで、美味しかったら美味しかったって言えばいいのに」

「あけすけな感想だけが美德だとは限らないわ」

だが恵那としては、どうしてもこの少女の可愛らしい口にあけすけな感想を言わせたい。

「でも、美味しかったでしょ？　すごく人気のあるお店なんだよ、ここ」

「顧客の舌は存外確かということね」

「美味しいよね？　ほんとに美味しいもん。わたしは美味しいと思うけどな」

「そろそろあなたの働き者の舌にお暇をやったらどうかしら？」

「ね、美味しかったって言ってみよ？　さん、はい」

「無粋なことね」

「むむ……」

敵は手強い。

ならばここは、三朝木奏直伝の搦からめ手だ。

「でもねー、ほんと言うとわたしのいちばん好きな豆かんって、こことは別のなんだけどね」

思わせぶりの風に、声を落として言う。

「そこのも美味しいよ。ちよつとわかりにくいお店だから、知らないと迷っちゃうけど」

効果はてきめん、フレイヤの肩がびくびくつと動いた。

「それはどちらのお店かしら？」

「教えてほしい？」

「それほどでもないけれど、後学のために知っておくのも悪くはないわ」

「美味しかった、は？」

顔を近づけ、につこり要求。

「……意地グライ悪」

「え？　聞こえないよ？」

聞こえていたけれど、わざとらしく訊き返す。

「ヒルダに調べさせればすぐにわかることだわ」

目標はなおも微弱な抵抗を見せてはいるが、今はまあ、このぐらいで満足だ。
「いいよ、教えてあげる。そこって日曜はお休みだから、今度また一緒に行こ」
笑いながら恵那は言い、フレイヤの頭にぼんと手のひらを乗せた。

「なら今日はここでおかわりをいただくわ。とても……美味しかったから」

ほんのわずかなはにかみを両頬に浮かべ、フレイヤは恵那に答えた。

「頼むのはいいけど、ひとりで全部食べられる？」

「それは愚問というものね」

その時、店内放送のチャイムがかるやかに鳴り響いた。

『お客さまのお呼び出しを申し上げます。本日、八階宝飾時計売場にて時計の修理をご依頼のお客さま……』

7

「それでは、お買い上げのお品は本日中にお届けいたしますので」

「お願いね。では、失礼するわ」

「またのお越しを心よりお待ちしております」

岩瀬店長を筆頭に、店次長、外商部長及び直属の部下、立ち寄った各階のフロアマネージャー、子供服売場の店長諸氏、その他接客に当たったスタッフ十数名……

総勢三十余名の肅然たる見送りを受け、名無しの賓客とその従者は花菱百貨店を後にした。
しゃちほこ張った歩きのまま、恵那は宝画堂書店の角を曲がる。

壁からそつと顔を出し、花菱正面玄関前の人だかりがこちらまでついてこないのを確認する。
そこでようやく一息ついた。

「ふう……」

「そんなに追っ手が気にかかるのなら、手癖の悪さは治した方がよろしくてよ」

「なんか泥棒してきたわけじゃないからっ！」

「なら、なにをそんなに緊張しているのかしら？」

「しない方がおかしいって……」

結局、お忍びの意向が尊重されたのは、お茶の時間だけだった。

その後はどこに向かうにも岩瀬店長が自らエスコートしてくれた上、移動は全て貸し切りの展望エレベーター、降りるなりフロアマネージャーと各店長の出迎え、丁寧無比な接客。店にない

品はその場で外商が手配し、なにをどんなに買っても値札の数字は話題にさえ上らない。遠巻きに見守る他の客たち。カメラ付き携帯など向けたが最後、なにやら目つきが鋭すぎる黒背広に黒腕章の店員が、背後からそつと忍び寄って何事か忠告する……

一小市民を自認する恵那にとっては、まさに悪い冗談のような、^{りっぜん}慄然たる買物風景だった。

「……なんかもつ、勘弁してって感じ」

「まあ、随分と心臓が弱くていらつしやるのね」

「あなたと違ってね」

ふたり、歩き出す。

見渡すと、街は夕暮れ時だった。

酒場やレストランの営業が始まり、雑居ビルに鈴なりの看板に次々とネオンが灯っていく。

休日の繁華街を笑いながら歩く、家族連れや恋人同士。

タイル貼りの歩道に落ちた影は長く、光は淡い橙色に滲む。

十歳ほどの金髪少女と、十七歳と少しの女子高生。風変わりな二人連れの姿も、^{ぐだ}隔てなく雑踏に馴染ませている。

「ねえ……」

恵那が言う。

「なにかしら？」

「時計、残念だったね」

「残念と言うほどではないわ。力及ばぬ事を認められる職人は敬意に値する、そうではなくて？」

「うん、そうかもね……」

宝飾時計売場でのやりとりを、恵那は思い返していた。

『こちらの時計なんです、裏蓋が開かないと言いますか、通常このような造りは考えにくいので、特殊な用途のものだとは思いますが……』

応対してくれたのは、いかにも仕事一筋という感じの時計師本人だった。

フレイヤの懐中時計は細部の形式からしてかなりの年代物であり、コンディションは素晴らしき状態で保たれているものの、出所やメーカーが判然とせず、分解すらできないので修理も調整もできない……さかんに恐縮しつつ、そう説明した。

『今のところは正常に動いているようですが……よろしければお預かりしてもつとよく調べることもできますが』

『結構よ。ありがとう』

フレイヤは自分の時計を受け取ると、鎖をつなぎ、元通りにおさめた。

別に落胆している風ではなかった。

今もそうだろうと思う。

だが……案内を引き受けた者としては、やはり責任を感じてしまう。

フレイヤのことをうかがう。

上等だが流行から遠い、黒の服、黒の帽子、そして青い薔薇飾り。明るい売場ではあれほど目立っていた、美しい白金色の髪……

今は薄闇に溶け込むようだ。

最初に会った時の印象が、幻のように蘇る。

そして、それがわずか二日前の出来事であることに気づく。

今、昼と夜の境目をフレイヤと共に歩いている。

どんなに綺麗な衣裳より、この少女には宵闇がふさわしい。

そう感じている自分がいた。

「これからどうする？ まっすぐ帰る？」

歩きながら声をかけた。

自分ひとりならこのまま歩いて帰るところだけど、彼女が疲れているようなら、奮発してタクシーをつかまえてしまってもいい。

「それが、どこかでご飯食べてく？ おかわり食べそこねたから、ちょっとお腹すいちゃったし、わたしがおこつてもいいよ？」

あれだけの服を一気買いできる子に向かって、おごるもなにもないと思う。

デパートでの大騒動は、たしかに彼女の『特別ぶり』を実感するには充分だった。

だが、恵那の興味と関心の磁石は、そんな外面を指し示さない。

フレイヤは無言のまま、暮れていく街並みのそこかしこに、ゆっくりと視線を巡らしている。

……やっぱ、時計のこと気にしてるのかな？

もう一言、なにか言おうとした時。

恵那は小さな時計店に気づいた。

洒落た扉の脇に木製のプレートが掲げられ、『ロレックス・オメガ・ブルガリ・機械式時計専門店』とある。喫茶店がブティックのような感じの店構えだ。

「……ねえ、ちょっと入ってみない？」

「あら、あなたも時計がご入り用？」

「そうじゃなくて、こういう専門的なところなら直せるかもしれないし」

「どうかしらね……」

「見てもらうだけでも見てもらおう？ ほら……」

気が進まない風のフレイヤの背を押すようにして、扉を開けて中に入った。

狭い店だった。背の高いショーケースに、二十ほどの高級時計がまばらに飾られている。

カウンターには中年の店主がひとりだけ、常連らしいカップルに金色の腕時計を勧めている。

「……投資にもいいですよ。限定品だし、使わなければ確実に値が上ります」

新しく入ってきた客を一顧だにしない。なんとなく、感じ悪いなと思った。

「すみません。時計の修理をお願いしたいんですが……」

「普通の時計は扱ってないよ」

「ぞんざいに言い、また先客との話に戻る。」

「……時計に普通と普通じゃないなんてあるの？」

「むっとしたが、専門店というのはこういうものなのかもしれない、と思うことにする。」

「とりあえず見てもらえますか？」

「食い下がると、カッブルの女性の方が恵那たちのことを見た。」

「そして、驚いたように笑いながら番を譲ってくれた。」

「時計、出してみて」

「フレイヤをうながし、懐中時計を預かる。」

「これなんですけど……」

「恵那から品を受け取っても、店主はまだ渋い顔をつくっていた。」

「蓋を開け、文字盤を一瞥する。」

「これ、オモチャでしょ」

「カウンターのガラスの上に、ぞんざいに置いた。」

「時計のツギハギだね、こりゃ。高級時計っぽく見せてはいるけど、こんなものがひよいひよい手に入ったら苦勞しないよ。どこで買ったの？」

「ええと、古いものだとは聞いたんですけど」

「花菱百貨店での対応とまったく違うことに混乱しながら、かろうじて恵那は答える。」

「古道具屋で買ったの？ 知識もないのに古いってだけでありがたがっちゃうから、こういうガラクタ掴まされちゃうんだよ。まあどうしてもってことなら受け継ぎだけはするけど、直らないから金払わないとか言われたら困るしなあ」

「店主は言い、常連の男と視線を交わして笑う。」

「子供ふたりが持ち込んだ怪しい時計なんかには、もともと興味も用もないのだろう。」

「こういう場面は見たことがある。子供の頃、父にせがんで骨董店についていった時だ。」

「素人の一見客をぞんざいに追い払った後、溜息をつきながら店主は言うのだ。」

「最近はあるいうなにもわかってない客が多くて……」

「……それに引き替えお客さまは、と、手のひらを返すように常連客を褒めそやす。」

「父は困ったように笑っていた。自分はなにもわからなかった。」

「フレイヤはなにも言わない。」

「きつと怒っているだろう。怒らないはずはない。」

「だが、きつとその何百倍も、恵那は怒っている。」

「もうわかってる、世界にはこういうやり方をする大人もいるのだ。」

「わかってるからと言って、十七歳の少女にはまだ、それを赦すことはできない。」

「結構です」

恵那は言い放った。

「物の価値がわからないお店に、大事な時計を預かってもらえませんか」
ケースから時計を取り上げ、フレイヤの手のひらに握らせた。

そのまま手首を引き、大腿で店を出る。

腹立ち紛れに乱暴にドアノブを叩きつけようとして……

「扉に罪はないわ」

彼女に制められた。

そつとそつとそつと、もうこれ以上できないくらい、丁寧に扉を閉めた。

外では穏やかな夕暮れが続いていた。

沸騰した怒りが一気に醒め、羞恥と後悔に取って代わる。

……わたし、なにしてるんだろ？

こんなちっちゃな子の前で、本気で怒って、ぐいぐい手を引っ張って……

「ごめんね……」

フレイヤの手首を放した。

彼女の肌が思いの外冷たかったことに今さら気づき、恵那は戸惑う。

「あなたが気に病むことではないわ」

細い指で時計を仕舞いながら、フレイヤは言う。

「文字盤に刻んである銘柄こそが、時計だと考える者も多いということよ」

駅に向かう人の列が、スクランブル交差点を渡っていく。

軽くクラクションを鳴らしながら、市バスが横を通り抜ける。

筆の穂先のように、街路樹が薄闇を含んでいくのがわかる。

「行きましょう」

「……ねえ、あなたの時計、わたしが絶対なんとかするから」

恵那は言った。

歩き出そうとしていたフレイヤが、立ち止まった。

そのまま振り返り、恵那に対峙した。

「ふうん……」

面白そうな玩具を見つけたように言う。

背伸びした瞳が、恵那の顔を正面から覗き込む。

「恵那」

「……な、なに？」

「カインベヴェーグング
動かないで」

なにが起こったのかわからなかった。

いつの間にか、通行人たちはいなくなっている。

宵闇の街と、恵那ひとりだけだ。

歩道にフレイヤの帽子が落ちている。

なのに、姿がどこにもない。

帽子を拾おうとしゃがみ込もうとして、恵那はぎくりとためらった。

――針？

違う。

それは、爪楊枝ほどの大きさの真っ赤な矢だった。

鋭い^{やじり}鏃も矢羽根もついた、精巧なミニチュアの矢。

百本ほどの矢が、歩道のタイルにびっしりと突き刺さっている。

そして、フレイヤの帽子にも。

「フレイヤっ……！」

叫んだはずの声が、自分に届かない。

周りを幾重にも囲まれている。

人のかたちをした、百ほどの小さな、紅い影。

「なっ……に、よ!? これっ……」

紅い影はみな、紅い弓をかまえている。

いつせいに二の矢を番え、鏃を恵那の顔に向ける……

「帽子が台無しになってしまったわ」

フレイヤの声が響いた。

それが、恵那の意識を正気に引き戻した。

自分のとなり、手が届くところに金髪の少女がたたずんでいた。

ずっとそこにいた顔をして、水面に映る月の風情で微笑んでいる。

とっさに抱き締めた。

背中を亀のように丸め、できるだけ強く腕の中にかばう。

あんな小さな矢でも、中^{あた}つたら痛い、絶対痛い！

でもこの子だけは、絶対にわたしが護^{まも}らないといけない……!!

「……息が苦しいわ。放してくださいさらない？」

フレイヤが言った。

見せ場を奪われ怒ったような、照れたような、でもたしかに安心できる声だった。

「あっ、ごめん……」

彼女を腕から解放した。

恐る恐る、辺りを見回す。

鳥籠のような銀色の光の網が、恵那たちを取り囲んでいた。

二射目の矢は全て、それに刺さっている。

いや、囲まれているのは恵那たちではなかった。

光の網は、ドーナツの内側に閉じ込めるように、紅い影たちをまさに一網打尽にしていた。

フレイヤは軽く身なりを整えると、紅い影たちに対峙した。

「誰もせずに襲うだなんて、随分と無粋なことね」

壁に映った光の反射のように、影たちがわずかに揺らいだ。

「……ねえ、これって、なんなわけ!？」

「大丈夫よ」

フレイヤは答える。

「なんであれ、わたしの敵ではないわ」

紅い影のひとつが、するりと前に浮き出した。

「汝ハ誰ゾ？」

年齢も性別もわからない、不思議な抑揚で問う。

「人に名を尋ねる時は、まずは自分から名乗る方がよくはなくて？」

黒衣の少女は答えた。

銀色の双眸が、無礼な使者を射竦める。

とたんに影たちが恐慌をきたした。

「アナヤ、コレハ鬼ナルゾ」

「異郷ノ鬼ナリ」

「鬼姫ナリ」

「ナレバ我レラ敵ウ能ワザルナリ」

「事ココニ至リテハ、我レラ疾ク逃グルニシクハナシ」

「ナラバイザ逐電セン。ミナ早ウ、早ウ……」

くるりと振り向き、この場を立ち去ろうとするが、網に阻まれどこにも行くことはできない。

「お待ちなさい」

その一声で影たちは観念し、ひれ伏すように地面に並んだ。

「あなたがたの主にお伝えなさい」

仕草に貴種の威厳を湛え、フレイヤは影たちに言った。

「古き闇狩りが、しばらく厄介になると」

光の網がかき消えた。

同時に、全ての紅い影たちも消えた。

夕暮れ時だった。

繁華街の真ん中に、恵那は立っていた。

人々の群れは歩道を行き交い、ヘッドライトを灯した車が通りを流れていく。

「え……えっ？ あれっ!？」

わけもわからず、恵那は辺りを見渡している。

視野の急激な変化に、思考がついていかない。

となりに裸髪^{ら髪}のフレイヤが寄り添っている。

「ねえちよつと、今のつて……」

「それから、挨拶は早めに済ませた方がいいわね」

「挨拶!？」

「せつかくだから、立ち会っていただけるかしら？」

恵那は浮かんでいた。

街の上空だった。

街路もビルも家々の屋根も、はるか足元で全てが豆粒のように遠く、斜めに傾^{かし}いている。

下から突き上げてきた夕風に、前髪がばさばさと乱れる。

とつさにスカートの裾を押さえ、それどころではないことに気づく。

どのぐらいの高さなのか、恵那には見当もつかない。

確実なのは、ここから落ちればただでは済まないことだけだった。

「あまり楽しそうではないわね」

フレイヤは今も傍にいる。

彼女まで斜めだ。

それが自然であるかのように、中空に浮かんだまま、気持ちよさそうに金髪をそよがしている。

「だってこれ、落ちたら死んじゃう、と、思うんだ、けど……」

「あら、無粋なこと」

したり顔で少女は答える。

「わたしに慈悲をかけるのなら、このぐらいは余興と思ってくださらないと」

恵那の腕を取り、冷たい手のひらをそつと重ねる。

それだけで、不思議に心が落ち着いた。

今、世界の中で正しいのはひとつ、彼女が傍にいてくれること、それだけなのだ、と。

「あなたは、なにが欲しいの？」

触れ合った指を放し、フレイヤが囁く。

「あなたの望むものは、なんなりとあげられるわ。それが、闇狩りを愛でるということ」

未踏の谷間、人知れず咲いては枯れる花冠のごとく、誇りに満ちてひっそりと笑う。

恵那はただ、フレイヤを見つめている。

言葉の意味がわからないわけでも、信じないわけでも、恐ろしいわけでもない。

ただ……全能を謳う少女の肩も、手足も、指も、唇も、頬も、瞳も。

全部がどこか、淋しそうに見えたから。

「ねえ、大丈夫？ 寒くない？」

恵那はフレイヤに問いかけた。

無意識に近づこうとして、体が宙にあることに気づく。

「……つとと」

「ほら、気をつけることね」

フレイヤに見守られ、体勢をまっすぐに戻した。

改めて、辺りを見渡す。

地上を歩いていた時より、空中はずっと明るい。

オレンジ色に染めあげられた光そのものの中を、漂っているかのようにだった。

闇は地上にうずくまっている。

遠くの山際の陰が、住宅地に長々と横たわっているのが見える。

あそこまでは昼で、あそこからは夜……

知らず湧きあがった心細さに、自分に馴染みのある地形を無意識に探す。

恵那に判別できるのは、駅前繁華街と、学校の敷地と、父の病院だけだった。

フレイヤは、懐中時計の文字盤を見つめている。

調子が悪いはずの時計に、不安も猜疑も覚えてはいない。

「ちょうど頃合いね……」

つぶやいて、外蓋をぱちんと閉じる。

指先を身体の前で重ね、こほん、と咳払いをひとつ。

「コスモス、ボーデン、シュテルン、ヒンメル、ベルク、フルス、ギプフェル、シュルフト……」

淡い桃色の唇から、古い古い詩がこぼれた。

恵那が知るはずのない、遠い異国の言葉たち。

なのに、彼女が伝えようとしている概念が、日本語として共に心に流れ込んでくる。

天、土、星、空、山、川、峰、谷……

「ねえ、それって……」

悪戯っぽい瞳をきゅっと絞り、フレイヤは恵那の質問を遮った。

「お国の呪詞もご存じなの？」

いつもの呆れ顔で問う。

「無粋なことね」

虚空でくるりと身を翻してみせる。

光の柱が、大地に突き立っていた。

一、二、三、四……全部で十本の円柱。

それは旧街区の一角をすっぽり覆うように五芒星に配され、時空を支える巨樹のごとく、あるいは滅神を祀った遺跡のごとく、藍色の天頂をまっすぐに目指している。

恵那とフレイヤは、まさにその星囲いの只中にある。

「これ……なに？」

「天国の石切場よ。呪詞の途中で多り出されるなんて、随分とせっかちなことね」

天地を突き通す光柱をどこか楽しげに見上げながら、フレイヤは答える。

だが、言葉の意味がわかったところで、恵那の知りたいことには遠い。

「それって、なんなの？」

「あなた、ハイネは好きかしら？」

「えっ？」

問い返そうとして、またも悪戯な瞳に止められた。

「では、仕上げには馴染みの招詩を使うとするわ」

夜を羽はたく鳥のように、フレイヤが両腕を広げる。

「死人は死人の国にあれ、命は生ける者にあれ」

薄闇に通る声。

眼下の街の異変に、恵那は気づいた。

光の柱を圧するように、数千数万という光の粒が地上から湧きあがってくる。

少女の肢体が光の粒をまといはじめるのを、ただ夢幻のように見つめていた。

十重が二十重に、四十重に、八十重に……

華奢な身体を護った黒絹が、光の重衣に溶けていく。

「我れ美しく咲き誇り、我が笑み心震わせん」

今や少女は、一糸まとわぬ裸身となっている。

岩戸を開けた女神のごとく、僅かな乳房も稚きみほども隠さぬままに、羞恥と恍惚の微笑を浮かべ、ただ、詠唱を続ける。

「美姫を惑わす阿片の媚薬、金剛石を鍛えし剣、一日千里を駆ける駿馬、竜が守りし黄金の林

檣、真水を美酒に醸す杯、高嶺の花を射止める矢、次手を授ける将棋水晶、止まらず廻る粉挽きの臼、最果て望む遠眼鏡、天使と悪魔を舞わす笛、世統べる者のお品書き……」

旅商人の口上よろしく、溢れ出る言葉たち、この世ならざる宝物の群れ、群れ、群れ。こころが重なっていくのがわかる。

少女の声音とそれが称える有様とが、恵那の中でたしかにひとつに結ばれる。

「我が名はフレイヤ。我と我が創造主の名において命ずる」

幾億の光珠が少女を取り巻く。

幾重にも幾重にも、時空の螺旋を描いて踊る。

「この象限に遊ぶ我が眷属たちよ」

真冬の蛍のような光、真夏の雪のような光。

原初の海から生まれ出た、生命の泡のように踊っている。

「偽りの夜を抜け」

恵那の脳裏で、真っ白な閃光が爆発した。

夕焼け空。

茜色に染まった雲。

ぱたぱた瞬きして、灯った電灯。

お化けのように枝を広げた、暗い木々の梢。

いつもの遊び場だった。

冷たい木のベンチに、小さな恵那は腰かけている。

家に帰る時間は、とつくに過ぎている。

もうすぐ夜が来るのに、恵那はそこにいる。

ベンチにはもうひとり、女の子が座っている。

小さな、小さな女の子。

だれかが忘れていった、着せ替え人形。

おすまし顔で、夕焼けを見ている。

恵那が帰ってしまったら、人形はひとりぼっちだから。

ひとりぼっちは、とてもさびしいから……

恐る恐る、手を伸ばそうとした時。

持ち主の子がやってきて、人形を拾いあげた。

「この子は、わたしのもの」

得意そうに笑う。

その胸で、とてもとても、幸せそうなお人形。

逆光に隠され、女の子の顔はよく見えない。

でも、とても眩しかった。

あの光の中、闇の中。

夕焼けが恐かった。

沈まない太陽が欲しかった。

お人形が欲しかった。

わたしだけに笑ってくれる、かわいいお人形……

夕暮れ時だった。

恵那はビルの屋上に立っていた。

ひとりになりたい時に来る、恵那のとおきおきの場所。

小さな恵那は追憶の薄暗がりに還り、今ここに立っているのは、十七歳と二ヶ月と少しの恵那。

なぜだろう、頬が温かい。

これは……涙だ。

わたし、泣いているんだ。

そう気づいたら、止まらなくなった。

悲しくも、悔しくも、痛くもないのに、はだかにされた心から嗚咽はとめどなく溢れ、おとが

いを伝った涙がパーカの胸元を濡らす。

泣きじゃくる恵那のことを、金髪銀眸の少女がただ、密かに見つめている。

「なにが視えたの？」

「お人形と……まだ、小さな頃の、わたし……」

「それは、あなたの夜国への入り口」

「……あなたは、だれ？」

知らず、言葉が口をついていた。

小さな頃からずっと抱いていた疑問の答えを、知る時が来たかのように。

「わたしはフレイヤ」

少女は答えた。

「フレイヤ・ナハトイエーガー
闇狩りのフレイヤ」

儚^{はかな}げな少女のかたちが、黄昏に棲^すむ幻のように薄れていく。

とっさに抱き締めようとしたが、腕は宙をかき抱くだけ。

唇に柔らかな感触が宿った。

二度目の口づけ。

流れ込むのは、あどけない愛欲と追慕のかたち。

その気配をただ、恵那は必死に貪^{むさほ}る。

「アウフヴィーダーゼェン
また会いましょう」

そして、フレイヤは消えた。

鈴のように声だけが響き、残光は衰えていった。

8

風が吹き渡っていく。

歩き慣れた道、見慣れた景色。

朝日がやけに眩しい、週明けの通学路。

休日気分が抜けていない学生たちが、鞆を夢の名残^{なごり}のように提げ、学校を目指している。

なにひとつ変わることのない時が、きつと今日も繰り返される。

そんな螺旋の只中に、一際強^{ひときわ}烈に月曜^{ブルーマンデー}病オーラを放出する女生徒——白河恵那の姿もあった。

「恵那っ」

制服のスカートをかるやかに揺らし、三朝木奏が駆けてくる。

「……おはよ、奏」

「浦島太郎みたいな顔してるよ？」

「あ、玉手箱もらってくるの忘れた……」

「その分だと大丈夫だったみたいね。携帯通じないし、家に電話しても出ないし……最悪病院か
と思った」

「病院？」

「病院？」

きよとんと聞き返す。

たしかに、一歩間違えると死ぬような目に何度も遭った気もするけど、果たしてそれが現実であつたのかどうか、まったく確信が持てない。

「……もしかして、まだ恋煩い好評朗ゲラン中なわけね？」

「うん、大好評」

「昨日の夕方、あの子と宮薙駅の辺にいたよね？」

「いたと思う、たぶんだけど」

「新聞とかニュースとか、なにも見てない？」

「なにそれ？」

「ああもうっ」

業を煮やした奏が、鞆からなにかを取り出した。

「ほら……」

毎日新聞の朝刊だった。

「今日はフツの新聞なんだ。っていうか、電車の中でも見てたわけ？」

「いいから読むっ！」

恵那の目前に一面を突き付ける。

『宮薙市上空に謎のせん光 負傷者800人以上』

「ええええっ!？」

紙幅いっぱいの大見出しに、恵那は絶句した。

奏から新聞を奪い取り、むさぼるように記事を読む。

昨日の夕刻、宮薙市全域で大規模な発光現象が見られた。無数の人魂が集まったようだったと言う人もいれば、昆虫かなにかに見えたと言う人もいる。それらはまるで意志を持つように上空に結集し、爆発的な閃光と、有線無線を問わない通信混乱をもたらした。

それがテロなどの人為的なものなのか、大規模な落雷や球電現象なのか、あるいはまったく未知の天文現象なのか、まだ原因は掴めていない。

閃光がもっとも強く目撃されたのは、まさに恵那たちがいた辺りで、人によつては目が痛くなつたり、気分が悪くなるなどの症状があり、多数が病院に運ばれた……

「昨日の夜からこの話でもちきりでしょ？ あたしは家にいたから気づかなかつただけど」
呆れ顔も極まれりという感じで、奏が補足する。

昨夜は両親が帰る前に眠ってしまったし、今朝は寝坊して部屋から直接玄関に降りたから、そもそもだれとも話をしていない。そんなことになっているとは思ってもいなかった。

「あれは本当に、本当だったんだ……」

思わずつぶやいた。

足元に遠く広がる夕暮れの街の様子が、鮮明に蘇る。

音楽のように響く、フレイヤの詠唱。

そそり立つ光の柱と、真つ白な光の奔流。

そして、最後に受け取ったはずの口づけ……

全ての出来事を、自分の中で今も咀嚼^{そしゃく}できていない。

どれが現実で、どれが夢かは、恵那にとってはさして重要ではない。

「また会いましょう」

たしかに彼女は、別れ際に言った。

ただ、その一言だけが事実だったと思いたいのには、新聞にはどこにも載っていないかった。

「……なんでいきなり落ち込むわけ？」

「やっぱり、もう会えないのかも……」

「おはようございます」^{グイテンモルゲン}

「ってわあっ!!」

至近距離から声をかけられ、あわてて振り向いた。

濃緑色の外套を羽織ったヒルデガルト・フォン・ファーパーが、伝令兵のように背筋をぴんと伸ばして立っていた。

「恵那様、奏様、ご機嫌はいかがですか？」

「おかげさまで、わたしの方は上々です」

登場を予期していたかのごとく、すらすらと応じる奏。

そのとなりで、まるで幽霊を見る目の恵那。

ヒルダは特に気にかけることなく、懐からなにかを取り出し、恵那の前に差し出した。

「今朝は恵那様にこちらをお届けにあがりました」

金色のリボンをかけられ、艶のある黒の包装紙で包まれた、15センチ四方ほどの紙箱。

「道中^{みちなか}で失礼かとは存じましたが、出来るかぎり早くと主人から命ぜられましたので」

恵那が受け取ると、ヒルダは結い上げた髪をわずかに揺らして微笑んだ。

「それでは、失礼します」

「……ちよつと待って!」

とつさに呼び止めた恵那。

「あの……また会いに行っても、いいですか？」

「いつでもどうぞ。主人も楽しみにしております」

分度器で測ったようにきっかり180度踵を返し、ヒルダは飄々と去っていく。

その外套のそこかしこに、小さな丸い穴が開いているのに、奏は気づいた。

「銃^{じゅう}痕^{こん}？」

つぶやいたが、敢えて見なかったことにする。

恵那の方は、ただただ夢見心地でいる。

「ねえ、これってなんだと思う？」

渡された小箱に、恐る恐る視線を落として訊いた。

「玉手箱だと思う」

「やっぱり？」

「そりやもう、どう考えても」

「……開けてみて、いい？」

「共白髪のお誘いってわけね。まっ、この際だからお付き合いしましょ」

「じゃあ、開けるよ？」

リボンを解き、包みをびりびりと破り、蓋をそおと開けた。

「うわあ……」

懐中時計だった。

まばゆい黄金色の外筐ケースに、吊り輪も裏蓋も全て金色。

文字盤が透けていて、中で動いている機械の様子が全て見える。

青黒く焼きしめられた針を除いては、部品も全て金色だった。

奏はなぜか難しい顔をして、恵那の手のひらの上にあるその時計を見ていた。

「ねえ恵那、その時計って……」

「やっぱり高いの？ これ」

心配になって、訊ね返す。

「高かったら、どうするわけ？」

「だって、何万円とかするようなら、返しに行かないと」

「何万円ってことはないと思うけどね」

「そうなんだ」

奏がそう言うなら、そんなに高価なものでもないだろう。

「もらっときなよ。時計を贈るって、『あなたと同じ時を過ごしたい』って意味だし」

「えっ、そうなの？ そっか、そうなんだ……」

からかわれていると知りつつも、自然に顔がほころんでしまう。

わかりやすい親友の反応を時計と共に鑑賞しつつ、奏はそれとはなしに言う。

「ところで恵那、マリー・アントワネットの時計って、知ってる？」

「ううん、知らないけど」

「なら別にいいけどね」

ブレゲ No 1600。
サンワサント

十八世紀の天才時計師アブラアン・ルイ・ブレゲが時のフランス王妃マリー・アントワネットから依頼を受けて製作した、超複雑懐中時計。精緻を極めたその構造は、現代の技術をもってしても再現困難とまで言われている。

四十四年もの歳月を経てそれが完成した時、王妃もブレゲも既にこの世にはなかった。

正統な主人^{あるじ}に仕える機会を永久に失い、蒐集家^{コレクター}の手を点々としたその時計は、一九八十年代に美術館から盗まれ、そのまま行方不明になっているはずだ。

恵那は贈り物の懐中時計をほんわりと眺めている。

ちよつと重くて大きいし、慣れないと文字盤が見にくいかもしれない。

でも、なかなか素敵な時計だなと思った。

ためつすがめつしているうちに、指がなにかの突起を押した。

ろん、ろん、ろん、ろん……

時計から可愛らしい鐘の音が聞こえはじめた。

「あれっ？」

「ミニッツリピーターって言って、暗いところでも音で時間がわかるようになってるの」

りんろん、りんろん、りん、りん、りん、りん……

「そうなんだ……きれいな音だね」

貝殻で潮騒を聞くように、時計をそつと耳に当てる。

軽く肩をすくめ、奏は言った。

「まあ、ある意味恵那にはぴったりのかもしれないけど」

- ENDE -